

## 第9章 アルベッド・グループ

——ルクセンブルクを中心とした典型的西欧重工業コンツェルン——

### はじめに

西欧経済は1950年代にめざましい発展の道をたどり始めた。1952年には欧州石炭鉄鋼共同体が成立したが、1958年初頭になると、欧州経済共同体が発足した。西欧の経済統合運動はここにさらに一歩巨歩を進めたのである。第2次世界大戦後の世界経済には地域的統合運動の機運が大きく盛り上がってきているが、これは新しい時代の要請に沿った必然的なりゆきであり、西欧諸国はこの運動の先頭をきって経済統合の成果をあげつつある。

経済共同体の発足によって、大陸6カ国はシューマン共同体の石炭・鉄鋼に限定された部分的な経済統合から進んで、全経済的統合の実現に努力することになった。同時にこの経済共同体の形成が、西欧諸国の通貨の自由化を促進し、ここに急速に広大な自由市場を現出させた。

これら一連の措置は、フランスや英国のような弱体な経済国家にとっては確かに冒険的なものであったが、各国の熱心な経済建て直し政策とともに、国際間の緊密な協働政策がとられるようになったことは、米国の強力な援助政策とも相まって西欧にその後の急速な経済発展をもたらした。

これらの措置によって西欧諸国の市場は大きく自由化され、国際取引が活発化し、資金の流通が円滑になり、西欧経済の発展に強い刺激が与えられた。しかし反面、国際競争が激化し、各国は近代化および合理化運動を強力に展開す

ることになる。したがって大企業間の結合、合同等再編成が急速に進行するようになると考えられた。このことは国内のみならず、西欧の自由化された大市場を舞台にして広く国際的に行われ、その結果国際的資本集団のいっそうの強大化をもたらすことが予想された。

すでに西欧重工業界にはいくつかの国際的な巨大コンツェルンが、その支配網をはりめぐらしていた（西欧を中心とした国際的重工業コンツェルンの支配網については、拙稿「西欧国際重工業コンツェルンの発展」『政経月誌』第47、48号、参照）。そして西欧の経済統合運動の推進力の一つは、これら大コンツェルンによる国際的な資本交流の事実であったということが出来る。

こうした国際的大コンツェルンの顕著な例として、筆者はすでにフランスの大重工業コンツェルンたるド・ヴァンデルおよびこれと双璧をなすシュナイダー・グループをとり上げて検討してきた。このシュナイダー・グループと密接な関係を持つルクセンブルクのアルベッド（ARBED）コンツェルンもまた、西欧きっての巨大な国際的コンツェルンである。ルクセンブルクのような小国にこうした世界的な大コンツェルンが存在することは、ちょっと奇妙に思われるかもしれない。だが実際はアルベッドにはフランス、ベルギー等の巨大な外国金融資本がいくつも大きく参加しているのであり、そしてアルベッド自身、フランス、ベルギー、西独、南北アメリカ等に広汎な資本的参与を行っている。すなわちアルベッドは西欧の国際的資本支配網の一つの重要な結び目となっているという点で特別の興味ある存在である。

## 第1節 アルベッドの歴史的発展

ルクセンブルクの製鉄業は地元の鉄鉱石を使用し、木炭を燃料として古くから活動しており、10世紀ごろにはライン地方にも輸出をしていた。17世紀初めごろから、鉄の需要増大に伴い、水力を利用した大工場が建設されるようになり、熔鉱炉で造った銑鉄を低炉で精錬して錬鉄としていた。しかし、19世紀初

頭にはなおルクセンブルクの製鉄所数はわずか10で、11基の木炭高炉と8つの精錬所があっただけである。その後ルクセンブルクの製鉄業は先進工業国、とくに英国との競争に敗れて衰退し、19世紀中ごろまでは設備および製法に何らの進歩もみられず、沈滞していた<sup>1)</sup>。

ルクセンブルクの鉄鋼業が再び発展を開始したのは、1840年代に国の南部にミネットの大鉱床が発見されてからである。それまではもっと高品位の沖積鉱石が使用されていた。このミネットをコークスをもって精錬するようになってからはひじょうに低廉な費用でパドル用銑鉄が生産されるようになり、1859年から62年にかけて鉄道の幹線が完成してのちはいっそう有利にこの新鉱石資源を活用できるようになった。

後にアルベッドに合流した諸会社が初めて現われ、ルクセンブルク鉄鋼業の発展に重要な役割を演じるようになったのはこの時からである。この鉱床の重要な採掘権を最初に獲得したのは、初期の先駆的な製鉄企業の一つであるエッシュ (Eich) のオーギュスト・メッツ社 (Société Auguste Metz & Cie) であった (1837年創設)。これが後年のアルベッドの中核となった会社である。同社はエッシュ付近にミネットの大鉱床を所有し、1848年から50年にかけて初めてこの鉄鉱石を熔鉱炉に使用した。1858年にはコークス専用高炉を建設した。この会社はのちにエッシュ製鉄合資会社 (Société en Commendite des Forges d'Eich) となった<sup>2)</sup>。

1855年のベッセマー法の発明で、燐分の多い銑鉄を生産するルクセンブルク製鉄業は一時困難な事態に陥ったが、1879年のトーマス製鋼法の発明によって再び発展への道をたどり始めた。このトーマス法の使用許可を大陸で初めて得たのはこのエッシュ社である (1879年4月21日)。

1882年にエッシュ社は、のちのアルベッド社長、ガストン・バルバンソン (Gaston Barbanson) 氏の祖父にあたる人物と共同でトーマス法の作業を目的としてデュデランジュ製鉄会社 (Société de l'usine de Dudelange) という新会社を設立し、デュデランジュ製鋼所を建設した。この製鋼所は熔鉱炉、塩基性転炉工場および圧延工場を有するルクセンブルク最初の完全な総合一貫工場で

図9-1 ルクセンブルク鉄鋼工場所在図



あった。トーマス製鋼法が開始されたのは1886年3月18日で、ルクセンブルク鉄鋼業の発展が再び始まった記念すべき日であった。

このほか当時の重要な製鋼工場としてはロダンジュ (Rodange 製鋼所, 1872年創設)、ドメルダンジュ (Dommerdange 製鉄工場, 1865

年)、ディフェルダンジュ (Differdange 製鋼所, 1896年) 等がある。これら諸企業の中でもデュデランジュ製鋼所は常に業界をリードする立場に立っていた。同製鋼所はディフェルダンジュ製鋼所とともに1900年に初めてガス動力工場を設置した。これは当時としては実に大胆な企画であったが、その後の製鉄業の技術的発展に大いに貢献した。またこの二製鋼所はルクセンブルクにガス清浄法をも採り入れた<sup>3)</sup>。

20世紀初頭のデュデランジュ製鋼所の状態について、1902年に同国を訪問した英国鉄鋼連盟会員の視察団の報告は大要次のように述べている。

「この会社はルクセンブルクおよびロレーヌに2,200エーカーの鉄鉱山をもっている。1日約1,900トンのミネットが工場から1マイル以内のところで採掘される。これは鉄道で炉に運ばれる。コークスもほぼドイツから輸入される。現在高炉5基が稼働しており、6番目が再建されたところで、まもなく火入れされるはずだ。この中4基は日産110トン、1基は160~170トンである。



銑鉄は全部ベッセマー銑で、隣接のベッセマー工場で鋼になる。転炉は6基で、10～15トンの能力である。

ブルーミングミルは1,000馬力のエンジンで動き、日産600トンである。大型梁材・レールミルは3,500馬力エンジンで4スタンドである<sup>4)</sup>。」

なお1901年当時のルクセンブルクの鉄鉱石生産は445万5,000トン、28基の高炉中稼働しているもの25基で、銑鉄生産は91万6,404トンであった<sup>5)</sup>。デュデランジュの銑鉄生産はルクセンブルク全体の約20%という大きな割合を占めていたわけである。

19世紀末から20世紀のはじめにかけて、世界鉄鋼業の発展は実にめざましかった。とくに勃興しつつあるドイツの拡大ぶりはすばらしく、またフランスやベルギー等の隣接諸国もその生産力を着々と増大させていた。この時期はまた企業合同と集中の急速に進むときでもあった。このような外国の重工業の圧迫に対抗して、ルクセンブルク鉄鋼業にも、独立を維持するための大規模な企業合同が行われた。すなわち1911年のデュデランジュ製鉄株式会社 (Société Anonyme des Hauts Fourneaux et Forges de Dudelange) を中心としたエッシュ製鉄合資会社 (Société en commandite des Forges d'Eich) およびルクセンブルク鉱山・ザールブリュック製鉄株式会社 (Société anonyme des Mines du Luxembourg et Forges de Saarebruck) の合同である。1882年創立のデュデランジュがもっとも新しく、一番古いのはエッシュで1847年の創立である。新会社は名称をアルベッド (ARBED, Aciéries Réunies de Burbach-Eich-Dudelange, S. A.) とした。ここにのちの国際的巨大大コンツェルンたるアルベッドが誕生したのである。この合同はデュデランジュの創立に参加したバルバンソン家のガストン・バルバンソン (Gaston Barbanson, のちにアルベッドの社長になる) と大陸粗鋼カルテルの発起者でその初代会長となったエミール・マイリッシュ (Emile Mayrisch) との協力によってできた。この合同は3社の間に発展してきた共同の利害および人的結合により望ましいものとされた<sup>6)</sup>。

合同が行われた時、エッシュ社はエッシュに高炉4基を有する工場 (半分はルクセンブルク鉱山・ザールブリュック製鉄会社によって所有されていた)、

表9-1 ルクセンブルクの鉄鋼工場（1913年）

資本系統	会社名	工場位置	熔鉱炉 現在 基数	製鋼 <sup>1)</sup> 現在基数			圧延 工場
				トーマ ス <sup>2)</sup>	平 <sup>3)</sup>	電気 <sup>4)</sup>	
ルクセン ブルク・ 仏・ベル ギー・独	ARBED	Dommelingen	3	—	2	2	×
		Esch an der Alzette	6	4	—	—	×
		Dudelange	6	4	2	—	×
		Saarbrücken (ザール)	8	5	3	—	×
ドイツ	Gelsenkirchener Berg- werks A. G.	Esch an der Alzette	11	4	—	—	×
		Belval bei Esch					
	S. A. des Hauts Four- neaux et Acières de Steinfort	Steinfort	3	—	—	2	—
		Deutsch-Luxemburgische Bergwerks u. Hütten A. G.	Differdange	10	5	—	—
S. A. des Hauts Four- neaux de Rumelange- St. Ingbert	Rumelange	3	—	—	—	—	
ベルギー	S. A. d'Ougrée-Marihaye	Rodange	4	3	—	—	×

注：×は存在を表わす。

出所：沢村宏『世界各国の製鉄工業』94、97頁。

ドメルダンジュに高炉3基、電気炉3基、圧延機1台を持つ工場を所有していた。ザールブリュック社は高炉8基、製鋼工場および圧延工場をザールブリュックの近くのブルバッハ（Burbach）に持っていた。デュデランジュ社は高炉6基、製鋼工場、圧延工場を持っていた<sup>7)</sup>。

1913年現在、ルクセンブルクには表9-1のような鉄鋼会社があったが、これで見てもアルベドがずば抜けて大規模であったことがわかる。

第1次世界大戦は、ルクセンブルク鉄鋼業に一大変革をもたらした。ルクセンブルクは1842年からドイツと関税同盟を結び、経済的に密接な関係にあった。トーマス製鋼法が発明されてからは、鉄鋼業においてはとくに両国の関係が緊密化した。けだしルクセンブルクは石炭を産出しないので、ルール<sup>8)</sup>の炭田と連結することが必要だったからである。そのため第1次大戦までルクセンブルクの鉄鋼会社の大部分はドイツ資本によって支配されていた。

しかし第1次大戦にドイツが敗北したためルクセンブルクとの関税同盟は破れて、両国の経済的連結が失われ、またフランス資本の強い圧迫があって、ルクセンブルクのドイツ資本は後退せざるをえなくなった。かくて1919年にはゲルゼンキルヘンはフランス、ベルギー、ルクセンブルク資本（アルベッド、シュナイダー、ド・ヴァンデル

等）の支配下に入って、テール・ルージュ製鉄会社（Société Métallurgique Terres Rouges）およびテール・ルージュ鉱山（Minière des Terres Rouges）となり、1920年にはドイツ・ルクセンブルクからはフランス、ベルギー、ルクセンブルク合資（ジョン・コックリル John Cockerill およびマリヌ・エ・サン＝テチエンス製鋼 Aciéries de la Marine et Saint-Etienne）のディフェルダンジュ・サン＝アングベール＝リュメラングジュ鉄鋼株式会社（S. A. des Hauts Fourneaux et Aciéries de Differdange-St. Ingbert-Rumelange—アディール Hadir）が創設された。シュタインフォルトはフランスの会社（Société Métallurgique de la Loire; Paris）に買収されたが、その後ベルギーのオランダ・ベルギー・マーストリヒト社（Société Hollando-belge de Maastricht）というコークス会社およびアングラール・アチュ＝グリーヴニエ製鋼株式会社（S. A. des Aciéries d'Angleur et d'Athus-Grievgnée）と密接な関係を結んだ<sup>8)</sup>。このアングラール社は第2次大戦後コックリルに合併され、シュタインフォルトはコックリル・ウーグレの子会社同様になった。

アルベッドは1925年にテール・ルージュ製鉄会社を合併した。同社は1926年にドイツに合同製鋼が出現してからは、これに次いで欧州第2の鉄鋼会社となった。同社の生産の発展は表9-2のとおりである。

旧テール・ルージュ社のルクセンブルク所在の工場はベルヴァル（Belval）およびエッシユの2工場であり、高炉11基、トーマス工場1、分塊工場2、圧

表9-2 アルベッドの生産高

(単位：千トン)

年	銑	鉄	粗 鋼	圧 延 材
1918～1919		427	373	312
1921～1922		730	935	622
1924～1925	1,206		1,182	967
1925*		521	508	417
1925**		1,788	1,766	1,470
1928		2,325	2,282	1,846

注：\*Terres Rouges を含まず。

\*\*同じく含む。

出所：Alfred Marcus, *Die Grossen Eisen und Metallkonomie*, 1929, p. 2.

表9-3 アルベットの鉄鉱山および炭坑所有

ルクセンブルク	1,214 (ヘクタール)
ロレーヌ	6,728
ベルギー	344
ドイツ	2,788
合 計	11,074

出所： Alfred Marcus, *op. cit.*, 1929, p. 2

延工場1がある。エッシュ工場は鉄鉱山も所有している。またドイツにはアーヘン (Aachen) にローテ・エルデ (Rote Erde) 工場があり、製鋼、圧延工場および龐大な褐炭の資源を持っている<sup>9)</sup>。

この合併により、アルベットの所有する鉱山はさらに国際的に拡大した。鉄鉱

石の生産は1918～19年に158万トン、1924～25年には292万トンであった。

第1次大戦後ルクセンブルクはベルギーと結びついて関税同盟を形成した。しかしアルベットは昔からのドイツとの関係も固く維持し、ドイツ領内に石炭資源を支配しつづけていたし、鉄鋼加工部門をも確保していた。中でも重要な支配はエシュヴァイラー鉱山連合 (Eschweiler Bergwerks-Verein, EBV) で、1927～28年の出炭は372万トン、鉄鉄生産は3万3,000トンであった。またフェルテン・ウント・ギヨーム・カルルスヴェルク社 (Felten und Guillaume Carlswerk A. G., Köln-Mülheim) は欧州きつての重要な線材工場であり、これらの支配を通じてアルベットはドイツの鉄および非鉄金属業とも深く結びついていた。

同時にベルギーやフランスとの関係も極めて根づよいものがある。ベルギーではフランダースのクロントリ・エ・トレフィルリ (Clonteries et Tréfileries, ベルギーの有力な線材工場) やリュアン圧延ボルト社 (Laminaires et Boulonneries du Ruan) 等に参加しており、またウーグレ・マリエと共同してサファク社 (Safak S. A.) 等多くの子会社をつくっている。マイリッシュ社長が1928年に死去してのち、ベルギーの大金融資本ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークがアルベットの株式25万株のうち4万5,000株を支配し、強力に侵入してくるようになったが、こうした両国資本の結びつきにはすでに以前から現実的土台ができていたのである。

フランス資本もまたテール・ルージュ製鉄合併の際に直接アルベットに参加している。また1919年に旧ゲルゼンキルヘンの工場からテール・ルージュ製鉄

と同時に設立されたテール・ルージュ鉱山には、シュナイダー等とともにアルベッドも参与している。このテール・ルージュ鉱山はオープリブ・ヴィルリユー製鉄に参与しているが、アルベッド自身もこの会社には強い支配的関係をもっている。

こうして第1次大戦後にアルベッドは雄大な国際的重工業コンツェルンの性格をはっきりと現わしてきたのである。

元来、ルクセンブルク鉄鋼業は輸出に依存すること大きく、アルベッドも輸出促進のため世界各地に支店を設けることに努め<sup>10)</sup>、また外国との資本的関係を通じて販路の確保に努力した。そして1926年にはアルベッドが幹旋役をつとめて、独、仏、ザール、ルクセンブルク鉄鋼業の間に大陸粗鋼カルテルを組織させた。アルベッド社長マイリッシュの熱心な努力がなかったらこの粗鋼カルテルは成立しなかったろうとまで言われているが、アルベッドが大陸諸国の鉄鋼業の統合に熱心だったのは、地理的に巨大な独仏両国にはさまれて、両方から圧迫を受けるというルクセンブルク鉄鋼業の困難な状態を打開するためばかりでなく、国際市場の安定と拡大に特別の関心を持ったからである。アルベッドが資本的に独仏の中間的立場を維持していたこと、さらにアルベッドがそれ自身大陸諸国に国際的な資本連鎖網を持っていたことが、大陸の鉄鋼業を緊密に結びつける上でひじょうに効果があったと考えられる。第2次大戦後の欧州統合運動でもルクセンブルクが重要な推進者として活躍しているのは、やはりルクセンブルクの重工業が国際的に広汎な利害関係を持っており、いわば資本的にはすでに国際的な一つの大きな統合体を形成しているという性格が、この運動の強い裏づけとなっているからであると考えられる。

- 1) *Iron and Coal Trade Review*, 21 Sept. 1934. 「ルクセンブルク製鉄業の沿革」。
- 2) *Iron and Coal Trade Review*, 6 June 1958. Marcel et Guy Steffes, *Les Industries Minière et Siderurgique du Luxembourg au fil des années*, 1962. pp. 42-43.
- 3) Steffes, *op. cit.*, pp. 44, 72-74. *Iron and Coal Trade Review*, 21 Sept. 1934.
- 4) *The Journal of Iron and Steel Institute*, 1902, II, p. 353.
- 5) *Ibid.*, p. 47.

表9-4 アルベットの粗鋼生産  
(単位：千トン)

	1955年	1956年
ルクセンブルク ザール	1956 740	2,145 752
合 計	2,695	2,897

出所：Continentaler Eisenhandel, Mai 1957.

6) Steffes, *op. cit.*, pp. 72-74. ガストン・バル  
バルソンとエミール・マイリッシュについて  
は、同書106-109頁参照。

7) *Iron and Coal Trade Review*, 6 June 1958.

8) 沢村宏『世界各国の製鉄工業』1942年、  
152-153頁。

9) Alfred Marcus, *Die Grossen Eisen- und*

*Metallkonzerne*, 1929, pp. 1-10. および沢村前掲書, 150, 152頁。

10) アルベッドは世界各国に販売支店を持っていた。U. S. Tariff Commission, *Iron  
and Steel*, 1938, p. 178.

## 第2節 第2次世界大戦後のアルベッド

アルベッドは第2次大戦後の困難の多い年を乗り越えて、急速に発展した。  
1956年現在その粗鋼生産は300万トン近くに増大した(表9-4)。

これは西欧の鉄鋼会社の中でも最大の生産量である。1956年のルクセンブルク  
の全粗鋼生産は345万トンであるから、アルベッドはその90%近くを占める  
わけであり、アルベッドがルクセンブルク経済においていかに重要な地位にあ  
るかが理解できる。

従業員は2万5,000人、資本金は30億ベルギーフランである。1956年現在、  
このほかに法定積立金が1億2,000万フラン以上ある。

アルベッドは発展のために償却および投資に大きな努力を払っており、1956  
年には償却は10億フラン台に上った。近代化投資基金は38億フランで、資本金  
よりも多くなっている<sup>1)</sup>。

1) *Continentaler Eisenhandel*, Mai 1957.

アルベッドの現状について詳しくは英国鉄鋼連盟会員のベルギー、ルクセンブルク  
鉄鋼業視察報告(*Iron and coal Trade Review*, 6 June 1958.) 参照。

### 第3節 アルベッドに参与する国際金融資本

#### (1) バルバンソン家

アルベッドの創立者バルバンソン家は、1955年においてもまだアルベッドの全株式の15ないし20%を支配しており、その代表者として一族からアドリアン・バルバンソン (Adrien Barbanson) が重役になっている<sup>1)</sup>。

#### (2) ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジーク

全株式の約16%はベルギーのもっとも有力な大金融会社、ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークの手にある。19世紀初頭のベルギー資本主義勃興の時に、王室と民間銀行家の協力によって創立されて以来、この会社は本国と植民地にまたがるベルギー経済の代表的巨大総合コンツェルンに発展したのである。現在では銀行、保険、鉄道、鉱山、精油、製鋼、公共事業、化学、繊維、兵器産業、木材、ダイヤモンドおよびその他の諸企業の巨大な集合体である。

このソシエテ・ジェネラルの支配する事業は大体においてベルギーとコンゴに集中されているが、第2次大戦後にはカナダにも重要な投資をしている<sup>2)</sup>。

ベルギーにおける主な支配をあげると、鉄鋼業においては主なる持株はコックリル・ウーグレ (Cockerill Ougrée, ベルギー最大のメーカーで1957年の粗鋼生産は200万トン以上) である。またプロヴィダンス製鉄 (Forges et Fonderies de la Providence, ベルギー・フランスにまたがる大会社), エノー＝サンブル (Hainaut-Sambre), アディール (Hadir) 等コックリル・ウーグレ系統の諸会社, およびヴィエイユ＝モンターニュ (Vieille-Montagne) 等にも参与している。

金属・電機関係ではラ・ブルジョワーズ・エ・ニヴェル (La Brugeoise et Nivelles, 主に鉄道資材), シャルルロワ電機製作所 (Ateliers de Constructions Electriques de Charleroi, A. C. E. C., 重電機に国際的名声のある会社) 等の持株がある。板ガラス工業にも関係しており、第2次大戦後はセメント練瓦合

同 (Cimenteries et Briqueteries Réunies, C. B. R.) を通じてセメント業界にも進出している。この会社はベルギー領コンゴにセメント会社を数社、カナダに1社 (Inland Cement, Alberta) 設立した。

重化学ではカルボシミック (Carbochimique), 製紙ではベルギー製紙 (Papeteries de Belgique), 機械・造船ではベルギー造船 (Compagnie Maritime Belge) に参与している。

カナダにおいてはモンリオールの持株会社, ソジェミス社 (Sogemines, Ltd.) を通じて, カナディアン・ペトロフィナ (Canadian Petrofina) をはじめ多数の会社の株を持っている<sup>3)</sup>。

ソシエテ・ジェネラルの支配する事業の中でおそらくもっとも大規模なものはベルギー領コンゴの開発であろう。同社はユニオン・ミニエール・デュ・オー・カタンガ (Union Minière du Haut Katanga) を通じてコンゴでもっとも強い支配力を有しており, コンゴの産出する莫大な富を吸収している。なおソシエテ・ジェネラルおよびコックリル・ウーグレ・グループについては次章において詳述する。

### (3) コント・ド・ローノワ・グループ

アルベットの株式の最大の割合 (約3分の1) がコント・ド・ローノワ (Comte de Launoit) グループの手にある。このグループはブリュフィナ (Brufina, Sté de Bruxelles pour la Finance et l'Industrie) およびブリュッセル銀行 (Banque de Bruxelles) を通じてアルベットを支配している。このコント・ド・ローノワ・グループも同じくベルギーの重工業コンツェルン, コックリル・ウーグレに大きな関係をもっている。こうしてアルベットとコックリル・ウーグレはベルギーの二大金融資本たるソシエテ・ジェネラルおよびコント・ド・ローノワを通じて相互に密接な関係を有していたのである。

### (4) シュナイダー

さらにアルベットにはフランス最大の国際的重工業コンツェルンたるシュナイダーが重要な参与を行っている。元来シュナイダーはテール・ルージュ製鉄の支配者であったのだが, テール・ルージュがアルベットに合併された際, そ



の支配権をアルベッドに譲渡して、その代わりにアルベッドの株をもつようになった。その持株比率は1950年代に10%から25%に増大している。アルベッドの副社長はシュナイダーの代表者シャルル・シュナイダー (Charles Schneider) である。

以上のようにアルベッドにもっとも強力に参加しているのはソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークおよびコント・ド・ローノワ・グループのベルギー系資本であり、次いでフランスのシュナイダー・グループである。ルクセンブルク資本はもっとも弱い。しかし戦後シュナイダーの支配力がかなり強化されてきており、同社をはじめとするフランスの諸会社の代表がこのトラストの理事会と事務局のメンバーを構成しているといわれる<sup>4)</sup>。フランスの *Economie et Politique* 誌の「フランスのトラスト特集号」はアルベッドをシュナイダーの支配下にあるとみなしている<sup>5)</sup>。

- 1) *Handelsblatt*, 28 Oktober 1955.
- 2) ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークについては、Liefmann, *Beteiligungs- u. Finanzierungs Gesellschafter*, S. 127-. *Handelsblatt*, 22, 23 März 1957. *L'Economie*, 20 Dec. 1956. *Industrie* (ベルギー工業連盟月報), nov. 1956. James S. Allen, *Atomic Imperialism: The State Monopoly and the Bomb*, 1952. アレン『原爆帝国主義』世界経済研究所訳, 253-304頁。John Gunther, *Inside Africa*, 1956. ガンサー『アフリカの内幕』II, 土屋哲訳, 183-186頁, 等および本書第10章参照。
- 3) *Société Générale de Belgique* 年次報告 (*Financial Times*, 20 March 1958.)。
- 4) ベ・エヌ・スースリン『鉄鋼業』古畑・酒井共訳, 90頁。
- 5) *Economie et Politique*, No. 5-6, 1954, p. 210.

#### 第4節 アルベッド・コンツェルンの世界的支配網

アルベッドの支配関係は、炭坑、鉄山から加工部門、さらに非鉄金属にまで及んでおり、また国内および西欧大陸のみならず、世界各地に広範囲に拡大し

ている。その主なものだけについて、まずフランスとの関係から見ると、

- (1) テール・ルージュ鉱山株式会社 (Société Minière des Terres Rouges S. A.)

もっとも重要な支配会社の一つで、元はドイツのゲルゼンキルヘン鉱山会社のローテ・エルデの工場であったが、1919年に敗戦の結果改組され、フランスのシュナイダーとド・ヴァンデル (33% 支配)、およびアルベットの支配に属したものである。その後アルベットがこの会社の株式4億フランス・フランの大きな部分を所有するようになった。従業員は2,000人で、主としてモーゼルの鉄鉱石資源の採掘を行っており、製鉄工場 (年産25万トン能力) を経営している<sup>1)</sup>。

(2) フランスの鉄鉱山では、さらにベルヴュ鉱山株式会社 (S. A. des Mines Bellevue, Longwy) およびエルヴィル株式会社 (S. A. d'Errouville, Paris) を支配している。後者は第2次大戦前には80万トン前後を採掘しており、ド・ヴァンデルが参与している。

(3) ミッシュヴィル社 (Compagnie Micheville) と共同でオーブリヴ・ヴィルリユ製鉄 (S. A. Métallurgique d'Aubrives et Villrupt) に大きく投資している。しかしこの会社の株式資本 (6億4,800万フランス・フラン) の過半数はフランスのポン＝タ＝ムソンが支配している。鉱石30万トン、鋳物鉄12万5,000トンを生産する。

しかしミッシュヴィルといってもポン＝タ＝ムソンといっても、結局同じシデロール (Sidelor) 団に属する会社である。ローラン (Laurant) グループ (中心会社はマリヌ・エ・サン＝テチエンヌ製鋼) とカヴァリエ (Cavalier) グループ (ポン＝タ＝ムソン) との結合によってシデロール団ができ、ミッシュヴィル、ポン＝タ＝ムソン、ロンバが合同してシデロール社を創ったのである。この時ミッシュヴィルはローランとカヴァリエによって共同して支配される持株会社となり、シデロールのほかに、オーブリヴ・エ・ヴィルリユおよびルクセンブルクのアディールにも大きく関係している。シデロール団はフランスだけで少なくとも労働者5万人、取引額750億フランを有するシュナイ

ダーヤド・ヴァンデルと肩を並べる大トラストである<sup>2)</sup>。

(4) フランス内では主として鉄鉱石資源をおさえているが、ベルギー・ルクセンブルクでは加工部門に投資している。その中主なものはルクセンブルクの鋼建築会社、ポール・ヴュルト(S. A. des Anciens Etablissements Paul Wurth)である。また銑加工会社プロデュラック(Produrac)は資本金2億フラン、ガンの近くのヴィシュラン(Wichelen)に工場がある。その他ルクセンブルク・セメント社(S. A. des Ciments Luxembourgeois)、エルシュトラン・エ・ゾルデ炭坑(S. A. Charbonnages de Helchteren et Zolder, ベルギー、年出炭100万トン以上)を支配している。

(5) コリュメタ(Columeta, Comptoir Métallurgique des Luxembourgeois)

全アルベッド・グループの販売会社で、海外にもその支配会社がある。

ドイツにおける支配関係は、電機、電気通信会社、および巨大な炭坑会社を中心としている。

(6) フェルテン・ウント・ギヨーム・カルルスヴェルク(ケルン＝ミューールハイム)

この会社は1954年には5億マルクの売上げを持ったほどの欧州きっての電線、電機の大会社である。従業員数は1万9,000人で、非鉄金属加工工場も所有し、アルベッドはこの会社を通じて、ドイツの鉄および非鉄金属工業と深く結びついている。

フェルテン・ウント・ギヨームの子会社の中でも異色のあるのはリブラル(Liblar)褐炭・煉炭会社で、第1次大戦後20億トンにのぼる巨大な石炭資源を発見している。またオーストリアその他外国にも多数の子会社をもっており、外国の子会社はすべてスイスのエルヴェルタ社(Elwerta A. G.)を持株会社として管理している。

(7) エシュヴァイラー・鉱山連合(E. B. V.)

アーヘンの大炭坑で製鉄所も所有しており、1955年の売上高は3億マルクを越えている。従業員は2万2,000人である。アーヘン地区最大の炭坑グループで、これを通じてアルベッドは同地区の出炭量の60%以上を支配している

(1954年には444万トン)。近年投資額は著しく増加している。エミール・マイリッシュ (Emile Mayrisch) という新堅坑が開設されており、コークス工場も拡大した<sup>3)</sup>。

またアルベッドはこの時期にエシュヴァイラーを通じてボッフム (Bochum, ルール) のロートリンゲン (Lothringen) 炭坑を獲得した。これによってアルベッドの石炭の基礎は大いに強化された。

エシュヴァイラーにはさらに年産15万トンのパイプ工場その他の圧延工場がある。

アルベッドは海外では次のような支配を行っている。

(8) プルミエ・ワイヤー製鋼会社 (Premier Wire & Steel Co., Rapstadt 所在) は南アフリカの線加工会社だが、アルベッド・グループの輸出にとって重要な役割を果たしている。

(9) 南米にも多数の子会社を持っている。そのうちアルゼンチンでは第1次大戦後ブエノスアイレスのサン＝マルタン製鉄会社 (Sociedad Anonima Talleres Metallurgicos San-Martin, Tamet) に参与した。平炉鋼、鋳物、建築材等を生産する会社で、アルゼンチン鉄鋼界に重要な地位を占めている。

ブラジルは戦後盛大な鉄鋼業拡張計画を進めており、1954年の製鋼量は115万トンであるが、このうち約15%がアルベッドの子会社ベルゴ＝ミネイラ鉄鋼会社 (Companhia Siderurgica Belgo-Mineira S. A.) に属している。この会社は国営製鉄業やその他の大規模な鋳物工場、合金鉄工場、発電所、線材工場等に参与し、広い子会社網をもっている。

以上述べたように、アルベッドには西欧の代表的な国際的大コンツェルンの支配の手が四方からのびてきており、そしてアルベッド自身がさらに国際的な資本的支配網を西欧大陸を中心として広く海外にまで広げているのである。こうしてアルベッドを中心として西欧の金融資本は複雑に交流し、相互に密接に提携している。

まずフランスではシュナイダー・グループが直接にアルベッドに参加してい

るし、もう一つの代表的重工業コンツェルンであるド・ヴァンデルは、アルベッドの子会社テール・ルージュ鋳山株式会社に33%の資本参与を行っている。

シュナイダーおよびシデロール団はオーブリヴ・エ・ヴィルリユにアルベッドと共同投資をしている。シデロールは、アルベッドを支えている国際的大金融資本団の一つであるソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークの子会社アディール（ルクセンブルクの大鉄鋼会社）に対しても強い支配力をもっている。またシデロール・グループの子会社であるベーリンゲン炭坑（Charbonnages de Beeringen, ベルギーのランブール Limbourg 炭田）には、ド・ヴァンデルおよびミラボー（フランスの銀行）とともにソシエテ・ジェネラルが同量ずつ参与している。

このベルギーのソシエテ・ジェネラルは、国家資本と結んでベルギー経済全体を支配する巨大コンツェルンであり、アルベッドはこれを通じてベルギー重工業団と緊密な関係を結んでいる。ことにベルギー最大の鉄鋼会社であり、国際的大コンツェルンを形成しているコックリル・ウーグレとは密接な協力関係にあり、共同で多数の子会社を所有している。ソシエテ・ジェネラルの支配会社の一つであるプロヴィダンスは、フランスのロレーヌ地方にも重要な鉄鋼工場を所有しているが、これはアルベッドの工場と近接していて、やはり両者の間に強い人的協力関係がある。プロヴィダンスはベルギーおよびフランスに鉄鋼工場を所有し、ルクセンブルクのラマドレーヌ（Lamadelaine）鉄鋳山やフランスの企業多数に関係している。

アルベッド自身の資本的支配網も、すでに述べたように、ドイツ、ベルギー、フランス等の近隣諸国をはじめとして遠く海外にまで広がっている。大陸における石炭の支配は、ベルギーのエルシュトラン・エ・ゾルデおよびドイツのエシュヴァイラー鋳山だけでも年産550万トンに上る。

粗鋼生産ではアルベッド、アディール、コックリル・ウーグレを一つの資本的グループとすれば、600万トン近くに達する。さらにこれにシュナイダーを加えれば800万トンに上るであろう。その他、ド・ヴァンデル、シデロール、プロヴィダンス等をも考え合わせると、その連携は西欧大陸全体に拡大してい

ると言うことができよう。

かくて国境により小地域に分割されている西欧においては、すでに国境を超えた大企業間の資本的交流が、活発にかつ大規模に行われているのである。シューマン・プランおよび経済共同体は大陸6カ国に跨がる単一の大自由市場を実現させたが、その裏には国境を越えて行われているこうした国際的資本結合という現実的土台がすでに存在していたのである。

- 1) *Handelsblatt*, 28 Oktober 1955.
- 2) *Economie et Politique*, No. 5-6, 1954.
- 3) *Continentaler Eisenhandel*, Mai 1957.

## 第10章 ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークと コックリル・ウーグレ

——ベルギーの国際的金融資本とその傘下の巨大重工業グループ——

### はじめに

西ヨーロッパにおける経済統合運動は、シューマン・プラン（ECSC）から経済共同体（EEC）へと発展し、めざましい成果をあげてきた。こうした広域経済圏の形成は、とりもなおさず大企業の自由な活動範囲を拡大するものであり、したがって彼らにさらに大きな発展の可能性をもたらしたのである。事実西ヨーロッパにおける大企業の発展は、経済統合運動とともに、著しく活潑化してきた。

元来、西ヨーロッパにおいては、地理的、歴史的条件によって、古くから資本の国際的拡大や結合が発達してきた。長い資本主義の歴史を通じて、大資本は国家的領域を越えて支配の手を伸ばしたのである。だが国家という強固な枠がある限り、資本の自由な国際的発展はある程度制限を受けざるをえなかった。しかし第2次大戦後、国家的障壁をとり除き、自由な大市場を形成しようとする運動が進展するにしたがって、大資本の自由な活動の場が国際的に拡大し、その発展を促進する基盤をつくり出したのである<sup>1)</sup>。

今日西ヨーロッパ経済を支配している国際的大金融資本は、いずれも古い歴史的伝統を持っている。そしてベルギー、ルクセンブルクのような、いわゆる小国にも、ドイツやフランスに匹敵する大コンツェルンが地中深く根をはっており、かつこれらヨーロッパのコンツェルン相互間には密接な協力関係が結ば

れているのである<sup>2)</sup>。

1950年代において日本の大企業をこれらヨーロッパの大企業と比較してみると、発展力はひじょうに旺盛であるが、蓄積が少なく、資本構成は悪く、組織化も著しく立ち遅れており、はるかに安定性に乏しかったことを痛感する。

私はすでに前章でシュナイダーと緊密に結合しているルクセンブルクのアルベッド・グループについて検討したが、本章ではさらにすすんでベルギー最大の金融資本ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジークと、その傘下の重工業グループ、コックリル・ウーグレ (Cockerill Ougrée) をとり上げることにする。

ベルギーは領土的には小国であるが、大陸ではもっとも早く産業革命を遂行した先進国の一つで、ヨーロッパ重工業の中心的地域をなしている。

ベルギーでは金融的集中はとくに強く、少数の金融グループによって一国の経済が支配されているといわれる<sup>3)</sup>。そのみならず、とくにフランス、英国、ルクセンブルクおよびドイツの大金融資本との結びつきによって、世界的なコンツェルン支配網の一環を形成している。

ベルギー重工業はこのような金融資本のもとで、ほとんど完全に組織化され、ヨーロッパ重工業における重要な勢力となっている。ここに取り上げるソシエテ・ジェネラル・グループおよびその傘下のコックリル・ウーグレ・グループは、そのなかでももっとも中心的な存在である。

1) 西欧の経済統合運動と大企業との関係については拙稿「欧州石炭鉄鋼共同体の新しい発展段階——国際コンツェルンの高度化と西欧経済統合運動の新たな展開——」東洋大学『経済経営論集』第16・17合併号、参照。

2) Cf. Tibor Scitovsky, *Economic Theory and Western European Integration*, 1958, pp. 22-32.

3) François Gay et Paul Wagret, *Le Benelux*, 1960, p. 66.



## 第1節 ベルギー経済を支配するソシエテ・ジェネラル・グループ

### 1. ソシエテ・ジェネラルの発展と国家との結合

ベルギー経済は少数の金融資本によって支配されているが、なかでももっとも強大な影響力を有しているのはソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジーク (Société Générale de Belgique) である。ソシエテ・ジェネラルはベルギー三大金融資本の一つであり、銀行、保険、鉄道、鉱山、精油、製鉄鋼、土木、化学、繊維、兵器、機械、木材、ダイヤモンドおよびその他の諸企業の巨大な集合体である。19世紀初頭のベルギー資本主義勃興期に、王室と民間銀行業者との協力によって創立されて以来、この会社はベルギー本国とその植民地にまたがるベルギー経済の支配的大コンツェルンに発展したのである。ベルギー経済はほとんどソシエテ・ジェネラルによって左右されているといっても過言でないほど、その勢力は強大である<sup>1)</sup>。

ソシエテ・ジェネラルは1822年8月に、オランダ政体下において低地諸国 (low countries) 南部の工業発展の促進のために、最初の投資会社として、ブリュッセルに、オランダのウィリアム王によってソシエテ・ジェネラル・デ・ペイ＝バ (Société Générale des Pays-Bas) として創立された。設立当時の資本金は5,000万フロリンで実に巨大な会社であった。この会社は国庫であり、発券銀行であると同時に預金銀行でもあり、公共事業体の債務を巨額に引き受け、各種の民間企業の創設にも参加した。また旧式の信用機関で、王侯の財政と緊密に結合していた。近代銀行的な業務の専門化は行われなかった。

1830年のベルギー国の建設によって、ソシエテ・ジェネラル・プール・ファヴォリゼ・ランデユストリー・ナショナル (Société Générale pour favoriser l'industrie nationale) と改名し、商業・投資銀行としてベルギー工業の発展と密接に関係してきた。20世紀に入ってからは、さらにソシエテ・ジェネラル・

ド・ベルジークとなり、ベルギー領コンゴの経済的・社会的発展にも、ユニオン・ミニエール社（Union minière du Haut Katanga）を通じて大きく関与した。

創立当時は国王が大部分の株式を所有していたが、1840～48年間に、ソシエテ・ジェネラルは国王の持株を買収した。続いて1850年には国立銀行（Banque national）ができたので、その株式を1万株所有すると同時に、発券業務を国立銀行に譲渡した。

ソシエテ・ジェネラルは預金為替業務も行ったが、しかしはじめは主として国債の売買等にあたった。1830～40年代にはロスチャイルド家と共同したり、あるいは単独でベルギー国債を引き受けた。また主要都市の公債や外国公債も引き受けた。

証券投資も行ったが、この場合には証券投資専門の子会社をつくり、それを通して行ったものが多い。1835年から62年までの間にソシエテ・ジェネラルの参与した会社は62社に上った。その中、銀行関係の参与は短期間のものが多いが、鉱工業企業の場合は長期支配的である。参与額は1835年の370万フロリンから始まり、1850年には5,480万フロリン、1860年にはさらに8,520万フロリンに達した。

1848年以來、ソシエテ・ジェネラルはその投資活動を主として基本的重工業の発展に集中させたが、それが同社の今日の発展をもたらした主要な原因である。第1次大戦前の20年間は少しく沈滞みだったが、大戦後再び活発な活動を開始した。

1934年の新銀行法によって、ソシエテ・ジェネラルの商業銀行的活動は、投資活動から分離され、新しく創設されたバンク・ド・ラ・ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジーク（Banque de la Société Générale de Belgique）に移された。故にソシエテ・ジェネラルは純粋な投資会社になった。そしてベルギー本国およびベルギー領コンゴにおける経済活動の重要な指導者となっている。

王室と民間金融業者の私的企業として発足した同社はその後王室の持株を一部引き受けたが、なお王室はかなりの量を所有していた。ところがレオポルド2世の時代（19世紀後期）に王室はこの持株をベルギー政府にかなり高い値段

で売り渡した。そのためソシエテ・ジェネラルには国家資本が入りこんでおり、公私混合形体の独占体となっている<sup>2)</sup>。

## 2. ソシエテ・ジェネラルの国際的支配網

ソシエテ・ジェネラルの支配する事業は大体ベルギー本国とベルギー領コンゴに集中されているが、第2次大戦後はカナダにも重要な投資をしている。

ベルギーにおける支配網は重工業を中心として次のように広くはりめぐらされている<sup>3)</sup>。

(1) 鉄鋼業では主な持株はコックリル・ウーグレである。同社はベルギー最大の鉄鋼会社であり、同時に自身で一つの国際的重工業コンツェルンを形成している。1955年6月にジョン・コックリル社とウーグレ・マリエ社という大会社が合併して設立されたものである。ソシエテ・ジェネラルはベルギー第2の大鉄鋼会社（在仏資産を含めた場合）であるプロヴィダンスの資本の半分も所有しており、同社を自己の支配下に収めている。このためベルギー鉄鋼業は大部分ソシエテ・ジェネラル・グループの支配下に入ってしまった。

(2) 金属・電機工業ではラ・ブルジョワーズ・エ・ニヴェル（主として鉄道資材）、ソシエテ・ド・トラクシオン・エ・エレクトリシテ（Société de Traction et Electricité、主として発電機）、シャルルロワ電機製作所（A. C. E. C.、重電機に国際的名声のある会社）等を支配している。

(3) 板ガラス工業にも関係している。ヴァル＝サン＝ランベール・ガラス会社（Cristalleries du Val-Saint-Lambert、美術工芸会社として世界的に有名）の主な持株会社である。

(4) セメント工業では、戦後は合同セメント煉瓦会社（Cimenteries et Briqueteries Réunies, C. B. R.）を通じてセメント業界にも進出した。この会社はコンゴにセメント会社を数社、カナダに1社（インランド・セメント Inland Cement, Alberta）を設立した。

(5) 化学工業ではカルボシミック、ペトロシム（Petrochim）、

(6) 製紙工業ではベルギー製紙（Papeteries de Belgique）、

(7) 機械, 造船業, 海運業ではベルギー造船会社 (Compagnie Maritime Belge)

(8) 非鉄金属ではホボケン冶金一般会社 (Société Générale Métallurgique de Hoboken) にそれぞれ重要な参与をしている。

カナダにおいてはモントリオールの持株会社ソジェミス社 (Sogemines Ltd.) を通じて関係している。この会社はカナディアン・ペトロフィナ (Canadian Petrofina), インランド・セメント, リオ・ティント鉱山会社 (Rio Tinto Mining of Canada) その他の会社の株式を所有している。

ソシエテ・ジェネラルが1957年に新たに関係することになった事業としてはベルギー磁気鉄板会社 (Compagnie Belge des Toles Magnetique, Tolmatil) をコックリル・ウーグレと協働して創設した。ソシエテ・ジェネラル系のベルギー・アルミニウム会社 (Compagnie Belge pour l'industrie de l'aluminium, Cobéal) は, カメルーンのペシネー・ユジューヌの株を所有しており, これを通じて低コンゴにアルミニウム工場を建設する計画をたてている。またベルギー石油会社 (Compagnie Belge des Pétroles, Pétro-Belge) はベルギーのペトロフィナと協働して石油の探査と採掘とを行っている。ソシエテ・ジェネラルはまたいくつかの子会社を通じて原子力工業にも関係している。

ベルギー領コンゴではソシエテ・ジェネラルはユニオン・ミニエール社 (Union Minière du Haut Katanga) を通じてその支配的勢力となっている。ソシエテ・ジェネラルはユニオン・ミニエールに表面上は僅か4.75%しか参与しておらず, 他の数社が合計約42%を所有しているのであるが<sup>4)</sup>, その中でももっとも重要な地位を占めるコミテ・スペシャル・デュ・カタンガ (Comité Spécial du Katanga, C. S. K.—25.6%参与) は, 実はソシエテ・ジェネラル系列の会社であり, 実際にはユニオン・ミニエールはソシエテ・ジェネラルの勢力下に入っているのである<sup>5)</sup>。

ユニオン・ミニエールはコンゴのカタンガ地方の世界的な銅資源の独占的支配者で, それに関連した諸鉱物資源 (コバルト, 亜鉛, 鉛, ゲルマニウム, カドミウム, 金, 銀, ウラニウム等), およびエネルギー等の大資源を一手に開

発しているコンゴの鉱山王である。そしてユニオン・ミニエールはそれ自身コンゴの多数の重要企業に参加を行っており、コンゴ工業を支配しているのである。

以上のように、ソシエテ・ジェネラルは、ベルギー経済のほとんどあらゆる部門に支配網をはりめぐらしている巨大なコンツェルンであるが、同時にヨーロッパの他の国際的大コンツェルンと結びついて、さらに大規模な世界的支配網を形成しているのである。例えばベルギー三大財閥の一つであるソルヴェー・コンツェルン (Solvay) と出資関係を通じて密接に結びついているが、ソルヴェーはベルギーのコンツェルンというよりも米国、英国、ドイツ等にまたがって、主として化学工業を支配している典型的国際コンツェルンであって、米国ではアライド・ケミカル (Allied Chemical) に20%、英国ではインペリアル・ケミカル (Imperial Chemical) に25%の参加をしており、ドイツの I. G. ファルベンとも結合しているのである。とくに重要なのはインペリアル・ケミカルとの結びつきで、これを通じてソルヴェーはロスチャイルド・グループと密接な関係を持っている。ロスチャイルドはまたソシエテ・ジェネラルにも直接大きな参加を行っているのであり、この三大金融資本の結びつきは極めて緊密である。

本章ではこのソシエテ・ジェネラル・グループの中の基礎的重工業部門である鉄鋼業のコックリル・ウーグレ・コンツェルンを取り上げて、さらに深く考察することにする。

コックリル・ウーグレ社は、1955年にベルギーの二大鉄鋼会社ジョン・コックリルとウーグレ・マリエトが合同してできたもので、一流の国際的大鉄鋼会社であると同時に、傘下に多数の関係会社を擁して、自身で一つのコンツェルンを形成している。

コックリル・ウーグレ・コンツェルンはそれ自体ひじょうに巨大な組織であるが、ソシエテ・ジェネラル・グループの中に含まれていることで、その勢力はさらにいっそう強大なものとなっている。例えば原料の面ではソシエテ・ジェネラルが膨大な石炭資源を支配していることが、コックリル・ウーグレに

表10-1 ソシエテ・ジェネラル支配下にある炭坑（1956年）

会社名	採掘量（千トン）
O. de Mons	613
Charbonnages Belges *	753
L. P. du FLENU	802
M. Fontaine	1,724
CH. REUNIS	657
GOUFFRE	480
B. d'AVROY	100
CH. Colard *	130
A. Dumont	1,335
L. en Campine *	1,293
HOUTHALEN	1,281
BEERINGEN	1,900
L. Verreening (オランダ)	1,250
DAHLBUSCH (ドイツ)	855
合計	13,173

注：\*特にコックリル・ウーグレ社の石炭部門といえる関係におかれているもの。

出所：Handelsblatt, 23 März 1957.

とって大きな力となっているのである（表10-1）。

こうしてコックリル・ウーグレは直接的参与、あるいはソシエテ・ジェネラルを通じての間接的関係によって鉄鋼業を中心として原料から加工部門までの縦断的な企業集中体を形成している。この組織はベルギーの鉄鋼業をほとんど包含し、さらにフランス、ルクセンブルク、ドイツ等へ拡大して、近隣諸国の国際的大コンツェルンとも緊密な結合関係を結んでいるのである<sup>6)</sup>。こうしてソシエテ・ジェネラルおよびその傘下のコックリル・ウーグレ・コンツェ

ルンは西ヨーロッパの代表的な国際的金融資本となっている。

- 1) Cf. Pierre Joye, *Les Trusts en Belgique*, 1960.
- 2) Liefmann, *Beteiligungs und Finanzierungs Gesellschaften*, S. 127-.
- 3) James S. Allen, *Atomic Imperialism: The State, Monopoly and the Bomb*, 1952. 邦訳 254頁。
- 4) ソシエテ・ジェネラル社年次報告, *Financial Times*, 20 March 1958.
- 5) John Gunther, *Inside Africa*, 1956, によると20%である。邦訳Ⅱ巻, 185頁。
- 6) 小平勉「ソシエテ・ジェネラル系鉄鋼会社の業績」鋼材倶楽部『情報』220号, 1957年3月1日。

## 第2節 ジョン・コックリル社の歴史的発展

### 1. 産業革命期における創業と基礎的建設

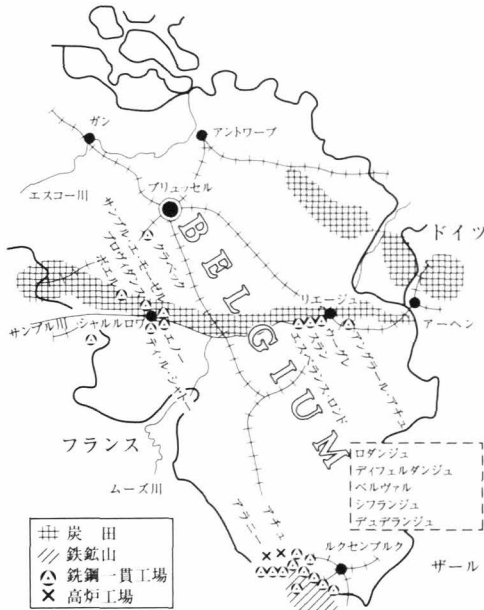
ベルギーは鉄鉱石および石炭資源を有しており、ムーズ (Meuse) およびサンプル (Sambre) の谷には中世紀にすでに多数の冶金業者が存在した。釘はエノー (Hainaut)、刃物はナミュール (Namur) で製造され、ディアン (Dian) は銅壺、銅鍋その他の金物類で知られていた。リエージュ (Liège) は兵器、刀剣類の諸国に対する供給地であり、兵器の変遷に適応して発展を続け、ナポレオン時代には彼の兵器廠の一つともなった<sup>1)</sup>。

またベルギーの繊維工業も歴史が古く、中世にはフランダース地方はヨーロッパ大陸における繊維工業 (主として羊毛) の中心地であった。その技術は英国に導入されて英国の繊維工業の発達に大きな貢献をしたのである。

ベルギーは英国に比肩しうる産業革命をもっとも早く経験した西欧大陸国である。その理由としては、まず以上のように古くから国内繊維工業および金属工業が発達していたことがあげられる。そのほかベルギーが欧州の枢要な位置を占め、北のドイツ平原と南のフランス平原とを結ぶ低平な隘路にあり、海峡をへだてては英国と接近していること、重要な交通路であるラインの河口に近く、かつアントワープという大港を持っていること、木材、石炭、鉄鉱石、皮革のような原料に恵まれていること、熟練した工業人口があること等の理由がある。また外国人がベルギーの工業化に重要な役割を果たしたことも忘れてはならない。ベルギーは1830年に独立を確保するまで、スペイン、オーストリア、フランス、オランダに次々に支配されたが、彼らはすべてベルギーの将来の工業的発展に貢献したといえる<sup>2)</sup>。

なかでも産業革命時における英国の影響はとくに大きかった。英国からは技術者、機械、および設計図が続々とベルギーに流れこんだ。産業革命の初期に

図10-1 ベルギー（ルクセンブルク）鉄鋼工場所在図



はオーケリー (O'Kelly), トーマス・マレー (Thomas Murray), ブラウン (Brown), ピーター・マクドナルド (Peter MacDonald), ジョン・ウィルキンソン (John Wilkinson) 等という英国人達が機械, 化学, 紡績, 冶金等の新しい技術をベルギーにもたらしたが, 機械の導入に関しては, コックリル家 (Cockerill) ほど大きな役割を果たした英国人はほ

とんどいないといつてよい。

ウィリアム・コックリル (父) (William Cockerill) およびその息子達, 女婿はベルギーの羊毛紡織を近代的な方法で再編成するのに大きな貢献をした。またウィリアムの末子ジョン・コックリル (John Cockerill) は, 最初は兄弟のジェームズ (James) と, その後は甥のコンラッド・グスタフ・パスター (Conrad Gustav Pastor) と協働して, 1830年代における世界最大の総合製鉄・機械会社であったスラン (Seraing) の有名な製鉄工場, ジョン・コックリルの隆盛をもたらした。それは石炭, 銑鉄, 機械, 蒸気機関, 機関車, 車両, レール, 兵器および他の多数の機械の生産が全部単一の経営によって統合されていた最初の総合的重工業企業の一つであった。

ジョン・コックリルの事業はベルギー国境を越えてオランダ, フランス, ドイツ, スペイン, ポーランド, ロシア等に拡大した。彼の兄弟のジェームズお



よびウィリアム（息子）はプロシアに移住し、そこに繊維および機械関係の企業を設立して成功した。こうしてコックリル家は世界でももっとも重要な国際的重工業コンツェルンの一つに発展したのである<sup>3)</sup>。

コックリル家の基礎をきずいたウィリアム・コックリル（父）の若い時の業績についてはほとんど知られていない。彼の出生の時の土地もわかっていないが、1779年に彼は英国のハスリングデン（Haslingden）に住んでおり、職業は指物師だったことが、バリー（Bury）の教区会の記録に残っている。その年のクリスマスに彼はバリーのエリザベス・チャールズ（Elizabeth Charles）と結婚した。1791年には彼はジェニー紡績機の製造業者として記されている。

彼の息子ウィリアムとジェームズを伴ってウィリアム・コックリルは失業と困窮の年である1797年に英国を離れた。彼は羊毛の紡績機械製造業者としてスウェーデンに彼自身の工場を設立しようとしたが、その計画は失敗し、木材貿易に関心を持った。しかしそれにも失敗してスウェーデンを離れ、ハンブルクに行ったが、そこで彼はマリ（Mari）というベルギー人と遭遇した。マリは羊毛を売るためにドイツに来ていたベルギーのヴェルヴィエ（Verviers）最大の羊毛紡績会社の一つ、シモニ・エ・ピオレ（Simonis & Biolley）社の代表者であり、彼にすすめられてウィリアム・コックリルはヴェルヴィエに行き、シモニ社のために専門に機械を作ることに同意した。同社は数年前の二回にわたるフランスの侵略によって起こったひどい事業の不振からちょうど回復しつつあるところであった。

ウィリアム・コックリルは自分の資産を持たなかったので、機械工場をたてる資本を彼のベルギー人の後援者に依存しなければならなかった。1800年に彼は各1万2,000フランの羊毛紡績機12台をシモニ社に供給した。この新しい機械を使用することによって時間と労働を著しく節約することができるようになったので、ヴェルヴィエ地方の競争的羊毛工業者達は、ウィリアム・コックリルに新しい機械の供給を要請したが、ウィリアム・コックリルはシモニ社のためのみ作業するという契約によって束縛されていたので、その需要に応じることができなかった。

1802年にウィリアム・コックリルは妻および末子ジョンを連れてくるために英国に渡ったが、その時ロンドンに小さな機械工場を設立していた若いノッティンガムの機械工、ジェームズ・ハドソン（James Hodson）にベルギーで協力することを要請した。コックリルはシモニ社以外の繊維工業家に機械を供給するためにハドソンをヴェルヴィエに連れていったのだと考えられる。ハドソンはウィリアム・コックリルの娘ナンシーと結婚し、彼自身の機械工場を建設した。彼は顧客に多額の信用を与えることのできる資本を持っていた。例えば1807年11月に彼は1,185フランの手付金をおき、残りは6年間に支払うという約束をした顧客に1万5,777フランの機械を供給することに同意している。ハドソンの資本はこの年間に54万7,000フランから79万8,000フランに増大した。その後彼はその事業を繊維機械から羊毛糸の機械紡績に拡大し、紡績工場に100人の労働者を雇った。こうしてコックリル家およびハドソンによる英国型の新式繊維機械のヴェルヴィエへの導入は、この町の繁栄をもたらしたのである。

1807年に、ウィリアム・コックリル（父）は急速に拡大する工業地帯の中心地であったリエージュ（Liège）に工場を設立した。フランスがオーストリア領ネーデルランドおよびリエージュの大公領を併合して以来（1797～1815年）、フランダース、エノー、およびムーズ、サンプルの谷間の工業地帯の繊維および機械工業（兵器を含む）に対して大きな新市場が開かれ、そのためベルギーの重工業および繊維工業は新たな刺激を受けて急速な発展を始めていたのである。ベルギー重工業は当時フランスよりも進んでおり、そのため自由にフランスに進出することができた。クラッパムはこのフランスの影響を繰り返し強調している<sup>4)</sup>。

リエージュ地方はエヌ＝サンプル＝ムーズ（Haine-Sambre-Meuse）炭田の上に位置していて、良質の石炭に恵まれていた。この炭田はフランス北部のノールおよびパ＝ド＝カレー炭田の連続で、フランス・ベルギー国境よりエヌ、サンプル、ムーズの各河川に沿ってこの国の中央部を貫いている大炭田であり、リエージュ、モンズ（Mons）、シャルルロワ等の地方では大量の石炭が

産出された（なおベルギー第二の炭田であるカンピーヌ炭田は1901年に発見され、1917年に採掘を開始した新しい炭田である）。

またリエージュ地方は鉄鉱石の産地でもあり、その露頭はシャルルロワ〜リエージュ間約50kmにわたってところどころに現われていた。ただし鉄鉱石の鉄分含有量は35～40%、燐分は約0.4%で、かなり低品位であった。なお1942年現在採掘可能な部分はほとんど掘りつくさされていて採掘量はごく少ない<sup>5)</sup>。

このように同地方は工業原料に恵まれ、かつ水路による交通の便もよかったので、製鉄業、機械工業、繊維工業等の諸工業が発達した。ウィリアム・コックリルは3人の息子とともにこのリエージュで羊毛紡績機械をつくった。彼は7年間に全部で300万フランの価格の繊維機械を製造した。ヴェルヴィエの古い工場も使用し続け、またフランスのランス（Reims）にも機械工場を建設して、息子のウィリアムに経営させた。

ウィリアム・コックリル（父）の末子ジョン——1809年には19歳だった——は、若い時からとくに著しい経営の才能を示していた。父親はしだいにジョンおよび他の息子達に経営上の責任を与えていき、1809年から1814年の間にリエージュの同家の大機械工場は大きく息子達の指導に依存することになった。

政府は工業家としての業績の価値を認めて、1810年にウィリアム（父）にフランス市民権を与えた。コックリル家はこのころにはウールト地方（Ourthe）における最大の機械メーカーになっており、梳機、紡績機、織機、染色機等を製造していた。1812年現在で2,000人を雇傭する大工場であり、繊維機械の生産額は年間250万フランに上ったと推定される。1810～12年のジェームズ・コックリルの書簡によると、当時同家の機械生産の半分はフランスに販売されていた。

この時期にコックリル家はリエージュのみならずヴェルヴィエ、スパ（Spa）、ウベン（Eupen）、アンシヴァル（Ensival）、ランス等に工場を所有あるいは支配していた。1813年には最初のワットエンジンを輸入し、それはまもなくコックリル家自身がつくり始めた蒸気機関のモデルとなった。すでに1815

年にはコックリルのリエージュ工場は蒸気機関および水力プレス機を生産していた。

すでにこのころコックリル家の名声は欧州大陸においてひじょうに高かったので、ウィリアムの息子達はプロシア政府の招きでベルリンのような遠方にまで活動を拡大していた。ジョン・コックリルはベルリンに動力使用機械による羊毛工場および蒸気による繊維機械の大製造工場を建設した。ノイエ・フリードリヒシュトラッセ (Neue-Friedrichstrasse) のジョン・コックリルの機械工場はベルリン最初のガス燃料使用の工場だった。また彼の兄ウィリアムは1819年に Lower Lusatia のゲーベン (Guben) に新式の大紡績工場を建設し、成功裡に経営していた。彼はゲーベンが工業中心地として発展するのに大いに貢献した。コックリル家がベルリン、コットブス (Cottbus), およびグリーンベルク (Grünberg) に設立した繊維工場は、結局はジョン・コックリルの所有となった。ナポレオン戦争後はコックリル家の羊毛機械に対する需要が急激に減少したので、コックリル家は蒸気機関、ポンプ、水力プレス機のような他の製品の製造に関心を集中した。

## 2. コックリルの本拠、スラン工場の設立

1816年にジョン・コックリルはオランダ王、ウィリアム1世に謁見した。1817年1月にウィリアム1世はジョンおよびジェームズ・コックリルに2万1,262フロリン (4万5,000フラン) という僅かな金でスラン城 (Seraing) を売り渡した。ここに西欧最大の製鉄・機械工場の一つであるコックリルのスラン工場が建設されることになるのである。

スランは新しい製鉄工場および機械工場を建設するのに優秀な立地条件を具えていた。すなわちスランはリエージュのコックリルの現存工場から近く、かつムーズ谷にあるその位置は、陸路および水路輸送に有利だった。また良質の石炭および石灰石を十分に供給されることができた。同時にその地方の住民達は長い間鉱工業に従事していたので、優秀な工業労働者を手近かに得ることができた。

スラン城はコックリルによって、それまでは低地諸国最大の製鉄工場とみられていたリエージュ大砲鑄造工場をしのぐ製鉄・機械工場に急速に発展した。最初スラン工場は最新式の鑄物工場（反射炉2基、キューボラ炉3基）、および英国式機械製造工場からなっていたが、パッドル炉は1820年、コークス高炉は1832年に建設された<sup>6)</sup>。

はじめは鉄鑄物、繊維機械、蒸気ポンプ、蒸気機関の製作に集中していたが、まもなく新しい技術を盛んに取り入れて多数の新しい機械を製造するようになった。1818年から1823年の間に蒸気機関43台が製造された。このころにはスランの鉄工場は欧州でもっとも完備した大工場の一つといわれるようになり、コックリル家は全ベルギー鉄工業に対して大きな影響力をふるうようになっていた。

このころすでにジョン・コックリルは蒸気船も建造していた。1820年にリエージュの新聞はコックリル家が長さ75フィート、幅19フィートの蒸気船を建造したと報道している。その後も1824年、25年、27年と次々に船を建造している。

オランダ海軍のゲルハルト・モルティス・レントゲン少佐のスラン工場訪問はコックリル製鉄工場の将来にとって大転換の鍵となった。レントゲン少佐は英国で鉄、機械、造船工業の技術的進歩を研究し、ちょうど帰国したところだった。彼はベルギー南東部の製鉄工業地帯を視察し、1823年1月に商業大臣に、ベルギー鉄工業および機械工業が立ち遅れており、英国に比べてはるかに劣っていると報告した。当時英国は約250基のコークス高炉を持っていたが、ベルギーは全く持っていなかったのである。レントゲンはベルギー製鉄業者の大部分がなお高い戦時利得の黄金時代を夢みていて、英国のはげしい競争に直面せねばならない情勢に適応しようとするのを忘れていて、と批判している。彼はベルギー製鉄工場に蒸気動力およびコークス高炉を導入することは緊急のことと考えねばならぬとし、新しい大機械工場を政府資金で設立することを政府に勧告した。そのためには現存ベルギー製鉄工場の一つをこの新しい事業の中心とするのがよいと彼は考え、次の四つの候補企業、すなわち、(1)クーバン

(Couvin) のアンノナン＝ジャンダルム (Hannonent-Gendarme), (2) グリーヴニエ (Grievègnée) のオルバン (Orban), (3) シャルルロワのユアール (Huart), (4) スランのコックリルのうち、その立地条件の良好なことと、経営者の優秀な能力のためにコックリルを選択した。

オランダ政府はレントゲンの勧告をうけ入れて、1823年にジョン・コックリルに対して、スラン製鉄工場を拡大し、再組織させるために多額の借款を与えた。ジョン・コックリルはこの借款を10年間に棒鉄で返済することに同意した。そして製鉄の最新の技術的改良の原理を教えるために、彼の工場にリエージュおよびナミュール (Namur) 地方の製鉄業者を入れることも承諾した。ジョン・コックリル工場に与えられた新しい資本はコークス高炉、圧延機および剪断機を建設するために使用された。スランはこうして欧州最大の総合的重工業企業の一つとなった。銑鉄および機械は同一工場で一貫的に製造された。

ジョン・コックリルは1823年に兄のジェームズがこの企業の持株を売却して以来、スラン工場の唯一人の責任者となった。スラン工場は大拡張にもかかわらず、生産が注文に間にあわず、さらに拡大するために巨額の資本を必要としていた。ジョン・コックリルはウィリアム1世に援助を要請した。国王は1825年に同工場に100万フロリンを投資し、企業の参加者となることに同意し、この大企業と密接な個人的関係を結ぶにいたった。フランスの巨大重工業コンツェルンであるシュナイダーおよびド・ヴァンデルが、時の政府と密接に結んで、その大きな援助を受けたことはすでに述べたところであるが、コックリルもその例にもれないことは興味深い。1825年に始まったコックリルの建設事業は1830年の革命時にも続行され、1834年になってようやく完了した<sup>7)</sup>。

1830年頃、ベルギーの工業は西欧大陸でもっとも進歩していた。例えば石炭生産をみても、フランスはウィーン会議 (1815年) 以後には僅かに年産80万トンないし90万トンであり、1828年になっても177万4,000トンであったが、ベルギーは1800年以後、政治的不安定にもかかわらず全産業が急速に発展し、1830年頃には約300の炭坑があり、平均約100人を雇傭し、年間600万トン以上を採掘していた。その後の20年間にも生産は急速に増大したが、ベルギーの国内需

要はさらに急速に増加して、1840年までには英国炭を輸入しなくてはならなくなったほどである<sup>8)</sup>。ベルギーは19世紀前半において英国と同じ歩調で工業的發展を遂げた欧州大陸唯一の国であった、とクラップムは述べている。

1830年にジョン・コックリルのスラン工場は2,500人を雇傭し、ひじょうに多種にわたる鉄製品を生産していた。またジョン・コックリルはリエージュおよびスランの工場のみにとどまらず、はるかに広汎にその勢力を伸長したのである。彼は欧州の各地で多数の新企業をおこし、製鉄工場、繊維工場およびその他の工場を建設した。したがって資源の確保は重要問題となり、国内においては石炭資源を独占的に所有していた。

### 3. ベルギー国家との密接な結合とコックリル・コンツェルンの形成

しかし1830年の革命によってジョン・コックリルは大きな打撃を受けた。ベルギーは独立を得たが、それは経済に著しい混乱をもたらした。オランダとベルギーとの間に戦争の危険がある限り、事業活動は沈滞していたし、関税障壁はベルギー工業家の市場であったオランダおよびオランダの植民地から彼らをしめ出した。その上オランダはアントワープがルール工業地帯と行っている多額の通過貿易をオランダの港へ移そうと努力していた。

1830年代初期の不安定なベルギーの経済・政治情勢によって、ジョン・コックリルはひじょうに困難な金融事情に陥った。事業は当時大量の生産を行ってはいたが、オランダ政府（革命後はベルギー政府）、および個人債権者に多額の負債を負っていた。例えばリエージュの有名な銀行家、デュボワ（Dubois）からは180万フランを借りていた。しかしジョン・コックリルはこの困難な時期を乗りきった。

ベルギー工業界は信用を回復しつつあり、ソシエテ・ジェネラル、ベルギー銀行（Banque de Belgique）、リエージュ銀行（Banque de Liège、1835年創立）等が、工業企業に対する金融を助けた。コックリルとソシエテ・ジェネラルとの関係はこのころからすでに著しく緊密化してきたのである。

コックリルがベルギーの大重工業家としての地位を再確立するのに成功した

のは、兵器、レール、車両、機関車等の製造業者としてであった。かつてはウィリアム1世に機械、蒸気機関の生産者としてとり入ったのであるが、今度はコックリルはレオポルド1世に彼の生産する大砲や機械なしにはベルギーは何をすることもできないことを納得させようと努力した。すでにそれまでもコックリルはベルギー軍隊に対しては兵器を、国有鉄道にはその重要設備を供給していた。

ベルギーの鉄道建設は1804年にリエージュの大砲工場に敷設されたのが最初で（これはベルギーのみならず、大陸最初である）、それから炭坑にも敷かれるようになった。これらはもちろん機関車なしの鉄道であった<sup>9)</sup>。ベルギーで本格的な鉄道建設が始まったのは独立後である。ベルギーは民間資本および民間企業が鉄道をつくる実力を持っていると考えられた少数の国の一つであったが、1833年秋の議会の討論の結果、国家の名誉のためもあり、また全事業を系統的に組織する必要もあってベルギーの鉄道計画は国家的事業であるべきことを決定した。この計画は1834年5月に議会を通過し、ただちに着手された。

ベルギーは西欧大陸における交通の要衝にあるので、その地理的位置の利益を開発するような鉄道網を計画した。すなわち鉄道建設計画は北と南（アントワープ、マリヌ、ブリュッセル、モンス、フランス）、東と西（オスタンド、ブリュージュ、ガン、マリヌ、ルーヴァン、リエージュ、ドイツ）を結ぶ交叉線をもって始まり、ガンから西方のルールへ、ガンから北方のアントワープへ、ティルルモンから東のサン・トロントへ、ブレース・ル・コントから南のシャルルロワ、ナミュールへと支線がひかれ、ベルギーは英国、フランス、ドイツ、オランダと347マイルの鉄道によって結ばれることになった。この建設計画は1844年までにほとんど完成した<sup>10)</sup>。

この鉄道建設に参加することによって、ジョン・コックリルの企業はさらに大発展をした。国内および国外からの注文に応じるために彼は再び工場を拡大し、第二番目の高炉、鋼鍛造場、および鍛錬工場を建設した。またリエージュ〜スラン間にあるスクレサン（Sclessin）に機関車用ボイラー製造工場を建設し、ティラール（Tilleur）にも工場を建設した。1839年にはスラン工場は10日



に1台の割合で機関車を製造していた<sup>11)</sup>。

この時期にジョン・コックリルは約60の企業を所有、あるいは支配して、一大コンツェルンを形成していた。1839年にJ. C. シモンズは、「スラン工場の蒸気動力は900馬力で、16台のエンジンが動いており、労働者数は2,000人ないし3,000人である。リエージュ工場では700人以上が紡績機から蒸気機関までの生産に従事している」のを見ている。また同じころ、グレンヴィル・ウィザース (Grenville Withers) は、「スランには炭坑4、高炉2基、週200トンの棒鉄を生産する能力のある圧延工場、鍛造工場、機関車、エンジンその他種々の機械をつくる200の旋盤を有する工場がある」と報告している。機械工業のほかに、ジョン・コックリルは機械メーカーとして繊維工業にも関係を持っていたし、また金融機関との結びつきも強化していった。たとえば2,000万フランの資本を有するベルギー銀行の創設(1835年)および運営には重要な役割を果たした。繊維工業関係では、ジョン・コックリルはベルギーのヴェルヴィエで羊毛を、リエージュで亜麻を紡績しており、アンデンヌ (Andenne) ではキャラコを染色していた。またスバでは繊維用梳刷および紡錘を製造した。

彼はプロシアにも大きな事業関係を持っていた。プロシアでは兄のジェームズおよびウィリアムがそれぞれアーヘンとゲーベンで事業を営んでいたが、ジョンはベルリン、ゲーベン、グリュンベルクの羊毛紡績工場、コットブスの綿糸紡績工場を支配、あるいは資本参与していた。その上彼はポーランドのPrzelburdzの木綿工場、バルセロナの木綿工場、アムステルダムの木綿品問屋、オランダ領ギアナのスリナムのプランテーションおよび蒸気動力による精糖工場、ストルベルク (Stolberg, アーヘン附近) における亜鉛鉱山等を所有していた。これらの企業のうち一部はコックリル家自身のものであり、他はウーグレ炭坑製鉄会社 (Société des Charbonnages et Hauts Fourneaux d'Ougrée)、スクレサン炭坑会社 (Société des Charbonnages de Selessin) のような、ジョン・コックリルが幹部重役の1人となっている株式会社の所有であった。

1839年現在におけるジョン・コックリルの外国投資はロッテルダムの子会社ネーデルランド・ストームブート・マーチャッピー (Nederland Stoomboot Maatscha-

pij)の株式や、フランスのガール県のロビアック (Robiac) の製鉄工場にまで及んでいた。当時このように広汎な工業帝国を支配した企業家は稀であった。

コックリル・コンツェルンの大部分の企業は1830年代の中旬ごろに繁栄を誇っていた。しかしこのように巨大な工業的集中体の全部門が完全に成功することはなかなか困難で、一部には失敗の例もあった。例えばアンデンヌのキャラコ染色工場は、数年にわたる政府の補助があったにもかかわらず、一時閉鎖され、その後製紙工場に転換した<sup>12)</sup>。

1841年に英国議会の「機械輸出特別委員会」(Select Committee on the Exportation of Machinery)が出した報告は、当時のベルギーの機械工業の進歩した状態について大要次のように述べている。

「ベルギーは機械工業に関する限り、英国のもっとも強力な競争者である。ベルギーの繊維機械は最上のマンチェスター製機械と同じ位、あるいはそれに近い位優秀であると考えられる。ジョン・コックリルのスラン工場は機械工のすばらしい養成所となっている。ベルギーのもっとも有名な工場はリエージュ、ヴェルヴィエ、ガン、マリヌ、ブリュッセル、およびティルモンにあり、全体で約8,000の機械業者がいる。製品は蒸気船、機関車、羊毛・木綿機械、製紙機械等である。絹織物機械もつくり始めている。彼らは大量の製品をスペイン、ドイツその他の大陸諸国、南北アメリカ、エジプト、トルコ等に輸出している。」

しかし繁栄の頂点に立っていたジョン・コックリルも1837年の商業恐慌の嵐から逃れることはできなかった。ベルギーの工業家達は西欧の他の諸国と同様に、過剰生産、過剰在庫、および国際情勢の不安定から強い打撃を受けた。

ジョン・コックリルが多額の投資をしていたベルギー銀行が支払いを停止し、彼が予想していたパリからベルギーまでの鉄道用レールの注文を確保することができなくなった時、彼は債務を支払うことが不可能になった。彼の資産は少なくとも2,600万フランの価値があったから、彼の債権者達の2,600万フランの貸付金は十分に保証されていると考えられた。ジョン・コックリルは協働者のグスタフ・パースターおよびピエルコットに対して、彼の債権者の要求を満足

させるためにスランおよびリエージュの工場を除く彼の全資産を漸次処分することを許可した。しかしジョン・コックリルの債権者達は会社の経営に彼等の代表者からなる委員会が参加するという条件で、彼らに対する支払いを一時延期することに同意した。この委員会は、コックリルの工場が株式会社になるべきこと、100万フランの借款を国家に要求すべきことを提案した。

しかしジョン・コックリルは独立独歩を続ける決心をし、ロシアからレール、機関車、車両の大量注文を確保することによって彼の企業をたて直すという計画をたてた。当時ロシアには僅かに一本の短い鉄道（セント・ペテルスブルクからツァールコエ・ソエロ〔皇帝の夏の別荘のある土地〕間の27キロメートルの鉄道）があるだけであった。

コックリルはロシア皇帝にその広大な領土に鉄道網を建設することを進言しようと考えた。彼は不幸にも交通事故で重傷を負い、それが回復したばかりであったが、それにもかかわらずロシアまで長途の旅をして直接皇帝と会見した。しかしついに目的を達することができず、帰国の途中熱病に冒され、1840年6月19日に50歳でワルシャワで亡くなった。

彼の債権者達はジョン・コックリルの資産の一部を売却した。しかし企業の心臓部であるスラン工場は資本金1,250万フランの株式会社として再組織された。その株式の半分はベルギー国家が所有した。この会社はウーグレ・マリエ社と大合同を行うまでジョン・コックリル株式会社（Société Anonyme John Cockerill）として創立者の名を冠していた。

ジョン・コックリルの甥であるコンラッド・グスタフ・パースターはその社長となり、スラン工場の再建に大きな役割を果たした。数年のうちにこの大冶金機械会社は再び健全な金融的基盤をとり戻した。1848年にはオスタンードーバー航路の最初のベルギーの蒸気客船がスランで建造された。翌49年現在におけるスラン工場の機械生産額は1,800万フランに上った。

1) J. H. Clapham, *Economic Development of France and Germany 1815-1914*, 1923, p. 58.

2) W. O. Henderson, *Britain and Industrial Europe 1750-1870*, 1954, pp. 102-103.

- 3) 以下コックリル家の歴史に関しては、主として Henderson 前掲書106頁以下を参照。
- 4) Clapham, *op. cit.*, pp. 57-58.
- 5) 沢村宏『世界各国の製鉄工業』1942年, 133-139頁。
- 6) 西欧大陸最初のコークス高炉はシュナイダーのル・クルーズー工場で1785年12月に火入れされたが、スランのコークス高炉建設はこれよりかなり遅れたことになる。
- 7) Henderson, *op. cit.*, pp. 123-124.
- 8) Clapham, *op. cit.*, p. 57.
- 9) *Ibid.*, p. 58.
- 10) *Ibid.*, pp. 140-142.
- 11) Henderson, *op. cit.*, p. 127.
- 12) *Ibid.*, pp. 128-129.

### 第3節 ジョン・コックリルの近代的重工業コンツェルンへの成長と国際的支配網の拡大

#### 1. ベルギー重工業の発展と大銀行資本との結合

19世紀前半におけるベルギーの鉄道建設ブームは、ベルギーの工業を著しく発展させた。この時期（1830～40年）に、クイエ（Couillet）、ウーグレ（Ougrée）、エスペランス（Esperance）、スクレサン（Sclessin）等の大製鉄所が創設された。また銀行資本の発展も急速であり、1822年には大規模な工業助成銀行ソシエテ・ジェネラルができ、今日まで重工業の金融的支配者としてコックリルを中心とした大重工業コンツェルンと緊密に結びついている。1835年にはベルギー銀行ができ、さらにリエージュ銀行（Banque Liégeoise）も創設された。

この中でもとくに重要なのはソシエテ・ジェネラルで、ベルギーの多数の産業部門の代表的企業をその傘下におさめ、事実上ベルギーのほとんど全経済にわたって支配力を握っているベルギー最大の金融資本である。前述のように、

表10-2 1850年出鉄量

	(万トン)	(人口1人当たりポンド)
英国	225	144
米国	56	100
フランス	53	60
ロシア	25	10
ドイツ	22	50
ベルギー	20	70

出所：小島精 編『ベネルックス鉄鋼業』1952年、14頁。

表10-3 ベルギー鉄鋼生産

(単位：万ロングトン)

年	銑鉄	粗鋼
1866	46	—
1870	56	—
1875	53	5
1880	68	13
1885	70	15
1890	77	22
1894	81	40
1895	82	45
1900	100	63

出所：British Iron and Steel Federation, *Statistics of the Iron and Steel Industries*, 1937.

ソシエテ・ジェネラルは1822年8月にブリュッセルで最初の投資会社としてオランダのウィリアム王によりソシエテ・ジェネラル・デ・ペイ＝バ (Société Générale des Pays-Bas) の名前で創立された。この会社は国庫であり、発券・預金銀行でもあって、工業事業体の債務を引き受け、また各種企業の創立にも参加した。それと同時に王侯の財政に緊密に結合した旧式な信用機関でもあった<sup>1)</sup>。

1830年の政治的変革でソシエテ・ジェネラル・プール・ファヴォリゼ・ランデュストリー・ナショナル (Société Générale pour favoriser l'industrie nationale) と改名し、20世紀になってから、さらにソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジーク (Société Générale de Belgique) となった。そしてフランスのクレディ・モビリエと同様に、ベルギーの金融資本の発展、事業銀行の発達に大きな貢献をしたのである。

この時期にはベルギーの工業も著しく発展した。製鉄量によってその発展ぶりを他の欧米諸国と対比的に示すと表10-2のとおりである。

生産量は他の諸国に比べて少ないが、人口1人当たりでは英国、米国に次ぎ第3位を占めている。

その後の発展もめざましく、表10-3のように増大している。

19世紀後半にベルギーの鉄鋼業は大体5倍に拡大している。ことに1870年代

表10-4 ベルギー製鋼業

年	工場数	転炉数	生産 (千トン)	トン当たり平均価格 (ポンド)
1864	1	1	0.3	20
1867	1	1	1.8	14
1870	1	2	6.0	12
1873	2	7	21	16
1875	2	12	54	10
1877	2	12	85	—
1878	2	12	155	—

出所：British Iron and Steel Federation, *op. cit.*

立った。1880年6月にブリュッセルで開催された全国工業博覧会においても注目すべき出品の一つはコックリル社のものであった。英国鉄鋼協会機関誌 (*The Journal of the Iron and Steel Institute*) の1880年第1号は同社の多方面にわたる出品品目を次のように伝えている。

- (1) コックリル社が採掘した石炭および鉄鉱石
- (2) 銑鉄および鋼の見本
- (3) 鍛鉄の見本
- (4) 千馬力のポンプ・エンジン
- (5) スクリュー・スチーマー用90馬力エンジン
- (6) パドル・スチーマー用70馬力エンジン
- (7) 各種機関車6台
- (8) ボイラー2台
- (9) 石炭破碎機
- (10) 攻城砲
- (11) 野砲2台
- (12) 山砲

当時同工場は370エーカーの敷地を占め、9,000人の労働者を雇傭し、年40万ポンドの賃金を支払っていた。合計1万1,660馬力の280台の蒸気機関を設備しており、工場の帳簿価格は150万ポンドに上った。1817年の創立以来、この年までに4万8,500台の蒸気その他のエンジン、440隻の船舶、その他製品を製造

からベッセマーおよびトーマス製鋼法の発明によってベルギーの製鋼業は急速に発展したのである(表10-4)。コックリルのスラン工場はこのようなめざましい発展のトップに

した<sup>2)</sup>。

同工場は1日約1,000トンの石炭およびコークスを消費し、種々の鉄鋼品のほか1年に機関車100台、据付用および船用エンジン70台、鉄橋1万トン、鉄船14隻その他を製造する能力を持っている。その製品の多様さにおいて、フランスのル・クルーゾー工場を除き比肩するものがないといわれた<sup>3)</sup>。

1893～94年度における生産は銑鉄15万5,000トン（前年より8,000トン増加）、粗鋼11万7,000トン、レール7万2,000トンに上った。すなわち全国生産に占める割合は、銑鉄が19%、粗鋼は28%に達する。

稼働高炉は5基あり、さらに大型の新高炉1基が翌年火入れされた。1891年現在でベッセマー転炉4基、平炉3基が存在した。コックリル社のベルギーにおける利益は約8万ポンドで、他の財源からさらに2万5,000ポンドの利益をあげていた<sup>4)</sup>。

## 2. 20世紀初期の拡大と合理化運動

20世紀に入るとベルギーの鉄鋼生産は、第1次大戦直前と大戦後の1929年を頂点とした好況の時代にめざましく増大している（表10-5）。

第1次大戦後の時代には世界的に産業の合理化運動が推進されたが、ベルギーにおいても再建・合理化運動による改善は大きかったと思われる。しかし全体としてフランスよりも近代化に立ち遅れた。ベルギーの大部分の重工業企業は、一部の生産部門は完全に近代化したが、工場全体を近代化せず、したがってかなりの内部的不均衡が現われた。例えばウーグレは製鉄部門は完全に機

表10-5 ベルギー石炭鉄鋼生産

（単位：百万トン）

年	石炭	コークス	銑鉄・ フェロアロイ	粗鋼
1900	23.4	2.4	1.0	0.6
1905	21.7	2.5	1.3	1.2
1910	23.9	3.1	1.8	1.9
1913	22.8	3.5	2.4	2.4
1917	14.9	0.6		
1920	22.1	1.8	1.1	1.2
1925	23.0	4.1	2.5	2.5
1927	27.5	5.6	3.7	3.6
1929	26.9	5.9	4.0	4.1
1930	27.4	5.2	3.3	3.3
1933	25.3	4.3	2.7	2.7
1935	26.5	4.4	3.0	3.0
1937	29.6	5.8	3.8	3.8

出所：British Iron and Steel Federation, *op. cit.*

表10-6 ベルギー鉄鋼会社資本金  
(1926年)

(単位：千ベルギー・フラン)

ジョン・コックリル	98,750
ウーグレ・マリエ	200,000
エノー	91,333
プロヴィダンス	86,000
アングラール	80,000
アチュ＝グリーヴニエ	66,000

出所：沢村宏「世界各国の製鉄工業」140頁。

表10-7 ベルギー製鉄工場規模 (1936年)

	高炉			製鋼工場		圧延工場
	現在 基数	操業 基数	現在1 日生産 高 (トン)	平炉	トーマ ス炉	
(1) S. A. John Cockerill (Seraing)	7	6	1,102	×	×	×
(2) S. A. d'Ougrée-Marihaye (Ougrée)	7	6	1,611	×	×	×
(3) S. A. Métallurgique de Sambre et Moselle (Montigny-sur-Sambre, Chatelineau)	7	4	1,350		×	×
(4) S. A. des Raminoirs, Hauts Fourneaux, Forges, Fonderies, et Usines de la Providence (Marchienne-au-Pont)	5	5	1,420		×	×
(5) S. A. des Hauts Fourneaux Forges et Aciéries de Thy-le-Chateau et Marcinelle (Marcinelle)	4	2	330		×	×
(6) S. A. Usines Métallurgiques de Hainaut (Couillet)	4	3	575		×	×
(7) S. A. des Aciéries d'Angleur et d'Athus-Grievgnée (Tilleur, Grievgnée, Athus)	9	4	900	×	×	×
(8) S. A. Métallurgique d'Esperance-Longdoz (Seraing)	4	3	450		×	×

注：×は存在をあらわす。

出所：沢村宏「世界各国の製鉄工業」140頁。

械化したが、製鋼部門ははるかに旧式であり、1933年ごろその一部はほとんど原始的な状態にとどまっていた。しかるに圧延部門には最新式のモルガン・ストリップミルがあった。コックリルは反対に製鋼部門を重点的に改良した。すなわちコークス・ガスによって加熱される平炉の建設、アメリカ式ブルーミングミルおよびセクションミル、半連続式ロッドミル等の設置である。このような設備の改善は戦前にも企図されたが、戦争による古い工場の破壊がその実現



を容易にしたのである。しかしコックリルでは高炉および発電機はあまり改良されなかった<sup>5)</sup>。こうした不均衡の結果、せつかくの一部の近代化の努力もその効力を最高度に発揮することができない状態であった。

1926年におけるベルギーの主要鉄鋼会社の資本金および1936年における各社の規模は表10-6 および表10-7のとおりである。

### 3. ウーグレ・マリエとの大合同

第2次大戦後のベルギーの鉄鋼生産高は、1954年ごろまではそれほど著しい発展を示すことはなかったが、戦争中の設備の老朽化と戦争による破壊のために、近代化および再建が盛んに行われた。また戦後における多数の競争国、ことに米国の技術的改善に対抗するためにも、近代化はぜひとも必要であった。企業の再建は競争力を強化するために生産の専門化をいっそう推進することを考慮して行われた。そして圧延部門と同様に製鉄鋼部門にも力を入れた。ベルギー鉄鋼業の再建の状態を簡単に述べると、主としてトーマス銑および鋼を生産する工場は製品の品質の改善に努力し、そのため戦争直後から旧式高炉を新たに建設し直すことに努め、1955年現在では日産500トン以上の能力を持つ直径5メートル以上の高炉が6基存在する。さらに2基が新設中であり、既存高炉も大規模に改修されている。鉄鉱石の操業は著しく機械化された。また製鋼部門も拡大されており、圧延部門では小型形鋼および鋼板が著しく発達している<sup>6)</sup>。

その結果1955年のベルギーの鉄鋼生産は戦前の最高生産高を示した1929年に比較して、約35%ないし40%も増加している(表10-8)。

1952年には米国の国内市場に匹敵する消費者を持つ欧州石炭鉄鋼共同体が設立されて、鉄鋼生産の集中および合理化はいっそう促進されることになった。そのためエノーとサンプル・エ・モーゼル社の合併によるエノー・サンプル社

表10-8 ベルギー鉄鋼生産

(単位：千トン)

年	銑 鉄	粗 鋼
1929	4,041	4,109
1938	2,426	2,279
1949	3,749	3,849
1951	4,868	5,054
1953	4,218	4,531
1955	5,384	5,889

出所：フランス鉄鋼連盟『統計月報』1954年5月号、1956年2月号。

の設立、ユジーヌ・ジルソン社 (S. A. Usine Gilsons) によるボーム圧延 (Laminoirs de Baume) の吸収等、活発な企業の再編成と集中化が行われた。その中でももっとも画期的な、世界の注目を集めたものがこのジョン・コックリルと、ベルギーのもう一つの大会社ウーグレ＝マリエ (Ougrée-Marihay) (詳しくは後述) の大合同である。この合同によってできたコックリル・ウーグレ社はベルギー鉄鋼生産の約半分を占める大規模なものとなった。

合同直前のジョン・コックリルの鉄鋼部門は、旧来のスラン工場のはかに、すでに1945年にアングラール・アチュ (S. A. d'Angleur-Athus) を合併して、そのアチュとグリーヴニエの2工場があった。年間生産能力合計約130万トンの高炉14基 (スランに8基、アチュに6基) があり、スラン工場には塩基性ベッセマー転炉8基、平炉4基、電気炉3基、分塊工場、形鋼および大型厚板工場、鑄造工場、鍛造ならびにロール工場があり、またアチュ工場には塩基性ベッセマー製鋼工場、棒鋼、ピレット、線材の各工場、リエージュのグリーヴニエ工場には、平炉3基、大型中型厚板ならびに薄板工場がある。

全製鋼工場の年間能力は塩基性ベッセマー鋼99万トン、平炉鋼22万トン、電炉鋼2万8,000万トン、合計123万8,000トンである。ベッセマー鋼はエスペランス＝ロンド社<sup>7)</sup> (Esperance-Longdoz) と共有の工場からの酸素送入によって生産している。銑鉄生産能力は100万トン以上である。

圧延部門では広範囲の圧延製品を生産しており、また各種の鍛鑄鉄製品、鍛鑄鋼製品を製造している。

そしてこの鉄鋼部門の上にはエンジン、蒸気機関車、その他各種機械の大規模な機械工場があり、ホボケンには巨大な造船所も所有している<sup>8)</sup>。コックリルは鉄鋼部門だけをとれば、世界の鉄鋼業の中でずばぬけて大きいというわけではないが、鉄鋼生産にとどまらず、さらに機械部門にのびていることに注目せねばならない。また鉄鋼部門の下には炭坑、および副製品工場の附属しているコークス工場を所有している。こうした原料から高度の機械製品までの長大な垂直的集中体としてのコックリルは、単に鉄鋼部門をとり上げてみただけでは想像できないようなひじょうに強大な実力を持っている。

合同前の資本金は13億5,000万フランで、63万6,000株（無額面）に分かれていた。従業員は3万5,000人であった。

- 1) R. Riefmann, *Beteiligungs u. Finanzierung Gesellschaften*, S. 127.
- 2) *The Journal of the Iron and Steel Institute*, 1880, I.
- 3) *The Journal of the Iron and Steel Institute*, 1884, II.
- 4) *The Journal of the Iron and Steel Institute*, 1895, I.
- 5) D. L. Burn, *The Economic History of Steelmaking 1867-1939*, pp. 410-411.
- 6) Banque de Bruxelles S. A., *Bulletin Financier*, No. 22.
- 7) S. A. Métallurgique d'Esperance-Longdoz は約120年前に設立され、Jemeppe, Seraing, Longdoz に三つの冶金工場を持っている。スランには年産合計40万トンの高炉4基があり、さらに大型の5号高炉が建設された。(日産650トン)。コークス炉はFlémale-Grandeにある。塩基性ペッセマー工場もスランにあり、50万トンの能力をもつ16万5,000トン転炉5基にコックリル社との共有の補助工場からの酸素送入手法が採用されている。
- 8) *Handelsblatt*, 22 Juli 1955.

#### 第4節 コックリル・コンツェルンの構成

ジョン・コックリルはソシエテ・ジェネラル・コンツェルンの一重要構成分子であるが、それ自身巨大なコンツェルン網を形成している。コックリルは子会社だけでも20以上所有しているが、その主なものは次のとおりである<sup>1)</sup>。

(1) フェルブラティル (Compagnie des Fers Blancs et Toles à Froid—Ferblatil, 冷間圧延ブリキ板会社)

所在地はリュティッヒのテイラルールであり、新しいコックリル・ウーグレの合同体の中に完全に融合された。この会社の資本金は4億5,000万ベルギー・フランで45万株に分かれており、その中ジョン・コックリル社は25万株、すなわち55.6%を所有していた。またコックリル社の背後にあるソシエテ・ジェネラルが直接この会社の株を6.5%所有していた。この持株が新たなコックリル

ル・ウーグレ合同体に入りこむから、ソシエテ・ジェネラルの新合同体に対する支配割合もそれだけ増大することになる。

フェルブラティルは1950～51年に初めて生産を開始した新会社であって、1948年に、コックリル、ソシエテ・ジェネラル、ドロワ＝マティアン製板会社 (Toleries Delloye-Matthien S. A.)、リエージュ金融産業連合 (Union Financière et Industrielle Liégeoise) 等によって創設されたものである。ブリキおよび冷間圧延薄板をつくる最新式のストリップ・ミルを持っており、年産能力は板12万トン、電気メッキ・ブリキ6万トンである。

#### (2) ドロワ＝マティアン製板会社

同社は前述のようにフェルブラティルの建設に参加したコックリルの子会社で、工場はユイ (Huy, Marchin) およびレジッサ (Régissa-Marchin) にある。熱間圧延薄板、ダイナモ板、特殊板の製造会社である。

#### (3) エノー＝サンプル製鋼会社 (Sté Métallurgique Hainaut-Sambre S. A.)

コックリルのもっとも有力な子会社の一つで、1955年にエノー社 (S. A. Usines Métallurgique du Hainaut) とサンプル・エ・モーゼル社 (S. A. Métallurgique de Sambre et Moselle) の二つの製鋼会社が合併してできたものである。

サンプル・エ・モーゼル社はモンティニー・シュル・サンプル (Montignies sur-Sambe) およびシャテリノー (Châtelineau) に工場があつて、高炉5基、トーマス転炉5基 (各20トン)、および圧延工場を持っている。また石灰石の山、コークス工場、鋳物工場等も所有している。合同当時の製鋼量は60万トン以上であつた。

サンプル・エ・モーゼルは1898年の創立であるが、一方エノー社もそれに劣らず古い会社で、資本金は3億5,000万ベルギー・フランである。クイエに最新式の工場があり、高炉4基、トーマス転炉4基、平炉2基、圧延工場、さらに機械工場もあつて、機関車を製造する。銑鉄および粗鋼の生産能力はそれぞれ40万トンであつた。したがって、エノー＝サンプル社の年間製鋼能力は100万トン以上に上る。

ベルギーおよびフランスの諸会社がエノー＝サンプルの株を所有しているが、そのうちメルキュール管理参与会社（Société de Gestions et de Participation Mercure, Paris）の持株比率は20%である。しかし同社は実はドイツのフリードリヒ・フリックの100%子会社で、フリック所有にかかるフランス会社株の管理を担当している。

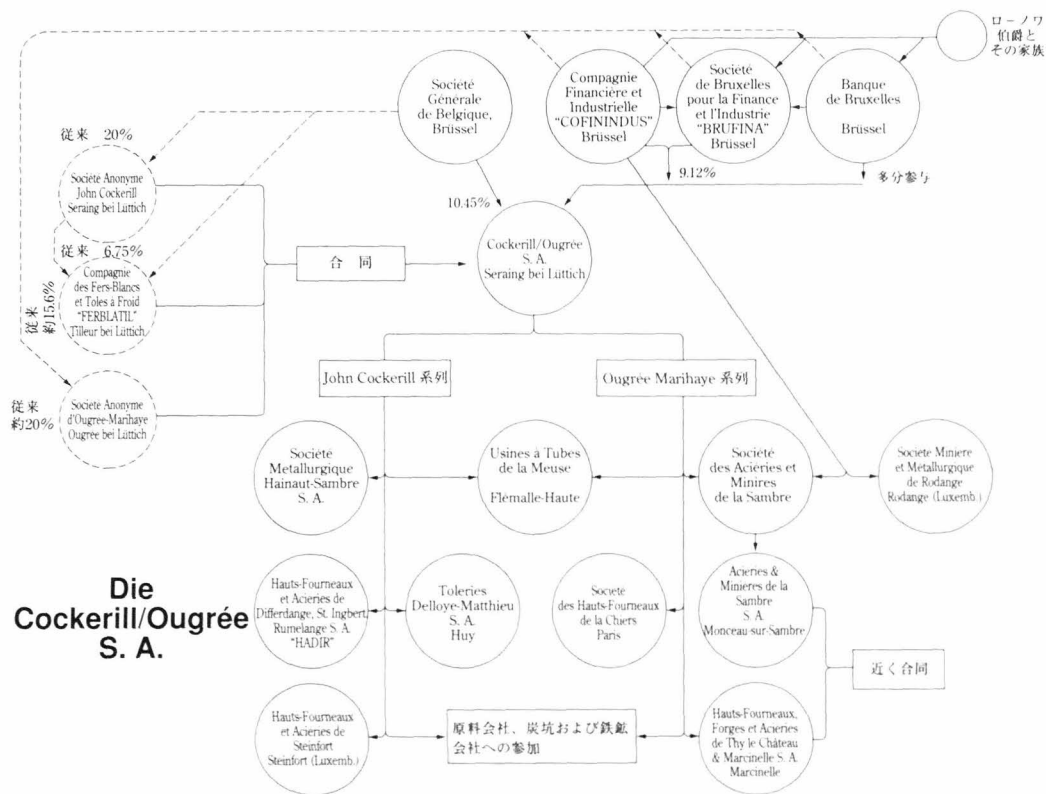
最大の株主はジルソン・グループ（Gilson）と提携して参与しているソシエテ・ジェネラルである。ジルソン・グループは前述のユジヌ・ジルソンという特殊鋼会社をも所有している。

エノー＝サンプルは自身多数の会社と関係をもっているが、そのうちの最大のものはフェニックス社（Phenix Works S. A.）である。フェニックス・グループのフェニックス薄板琺瑯工場（Phenix Sheet & Enamelling Mills）は、シエール製鉄会社（Société des Hauts Fourneaux de la Chiers）とともにフランスのチオンヴィルの冷間圧延会社（Laminoirs à Froid, Thionville）の株式を所有している。

エノー＝サンプル社はその他石炭、鉱石部門ならびにエネルギー分野において次のような会社の株式を所有している。

- i. ウタラン炭坑株式会社（S. A. des Charbonnages de Houthalen, Bruxelles）。資本金の23%はソシエテ・ジェネラル、7%はコックリル・ウーグレ、一部はプロヴィダンスが所有している。
- ii. マルリー・コークス株式会社（S. A. Cokeries de Marly, Bruxelles）
- iii. エズモン採石精錬（Carrières et Fours à Chaux d'Aisemont）
- iv. プリニー鉱山株式会社（Société des Mines de Boulogny, S. A., Paris）
- v. ジェネラル・サンダー鉱山会社（General Sandur Mining Co. Ltd., London）
- vi. エノー電力連合株式会社（S. A. Union des Centrales Electriques du Hainaut, UCE, Hainaut）
- vii. シャルルロワ地域電力グループ（Groupment des Centrales Electriques de la Région de Charleroi, 組合企業, Montignies-sur-Sambre）

図10-2 コックリル・ウーグレ社組織図



viii. グルパン不動産グループ (Groupement Immobilier "Groupims", 組合企業, Bruxelles)

(4) アディール (Hauts Fourneaux et Aciéries de Differdange, St. Ingbert Rumelange S. A.—Hadir)

コックリルはアディールに強力に参加しているが、しかしこの会社の株のかなりの部分 (50%) はフランスのマリヌ・エ・サン＝テチエンヌ (シデロール・グループ) に所有されている。しかしソシエテ・ジェネラルの所有する15%の持株と併せて、コックリルの勢力はかなり大きい。

アディールは自身ディリンゲン製鉄会社 (Dillingen Hüttenwerke), シャンパーニュ冶金株式会社 (Sté Métallurgique de Champagne S. A.) および多数の炭坑、鉄鉱山等を所有している。

アディールの生産能力は1956年現在で銑鉄100万トン、トーマス鋼90万トン以上で圧延工場は線およびその加工品にまで及んでいる。

3億5,000万フランの増資で資本金は11億フランになった<sup>2)</sup>。1956年の粗鋼生産能力は90万トンであったが、これはディフェルダンジュ工場によるもので、この工場の代わりに新たに大規模なトーマス工場が建設され、1959年に完成している。リュメランジュ工場は単圧工場である。

(5) シュタインフォルト鉄鋼会社 (Hauts Fourneaux et Aciéries de Steinfort—ルクセンブルク)

この会社もコックリルの子会社である。1931年の鉄鋼工場閉鎖以来、その生産は化学製品に集中している。

(6) 原子力研究シンジケート (Syndicat d'Etude de l'Energie Nucléaire)

コックリルは同シンジケートに大きく参加しているが、ソシエテ・ジェネラルおよびその他の多数の会社も同時に参加している。

(6) 多数の鉄鉱山および炭坑会社

以上コックリルおよびその主なる子会社の分だけでも合計すると、銑鉄生産能力は約300万トン、粗鋼は約330万トン以上に達するのである。さらにプロヴイダンスにはソシエテ・ジェネラルが重要な参加をしており、同社もコックリル

ル・コンツェルンの一部と考えられる<sup>3)</sup>。またジョン・コックリルと補助工場を共有しているエスペランス・ロンドも同コンツェルンの一員とみなされている。これらを含めればコックリル・コンツェルンの生産能力は銑鉄400万トン、粗鋼450万トン以上に達する。さらに原料から加工部門までの縦断的な結合も形成しており、その範囲はルクセンブルク、フランス、ドイツ等へのびているのである。

- 1) 以下主として *Handelsblatt*, 22 Juli 1955および *Continental Iron and Steel Trade Reports*, 12 Jan. 1960, による。
- 2) *Continental Eisenhandel*, Mai 1957.
- 3) *Economie et Politique*, Mars 1955.

## 第5節 ウーグレ・マリエ・コンツェルンの発展と その支配網の形成

ウーグレ・マリエ社は1835年にウーグレ炭坑製鉄 (*Charbonnages et Hauts Fourneaux d'Ougrée*) の名称の下に創設された。すなわちすでに160年以上も前から炭坑と製鉄所とが一つに結びついた会社だったのである。この会社には前述したようにコックリルが重要な参加をしており、すでに当時から両者は緊密な関係を保っていた<sup>1)</sup>。

1892年にウーグレ製鉄会社 (*Société de la Fabrique de fer d'Ougrée*) と合併し、ウーグレ社 (*Société d'Ougrée*) となった。1900年にはさらにマリエ炭坑会社 (*Société des Charbonnages des Marihaye*) と合併して炭坑の土台を強化し、ウーグレ・マリエ株式会社 (*S. A. d'Ougrée-Marihaye*) となった。この会社はいわゆる旧ウーグレ社であって、第2次大戦後にコックリル社と合併したものと異なる。この旧ウーグレ社は第1次大戦後、合理化の見地から次の4社に分割、経営されることになった。

- (1) コフィナンデュス (*Compagnie Financière et Industrielle* — *Cofin-*



du)

この会社は関係会社の証券を所有する純然たる持株・金融会社で、この会社はのちに述べる新ウーグレ社の株式を5万株（過半数）所有している。コックリルと合併したのはこの新ウーグレ社である。

コフィナンデュスはローノワ伯爵（Comte de Launoit）の所有にかかり、この財閥の一分野をなしている。ブリュフィナ（Sté de Bruxelles pour la Finance et l'Industrie—Brufina）も同グループの金融会社であるが、このブリュフィナは新ウーグレ社の株式1万株を所有している。しかるにコフィナンデュスは新ウーグレ社の5万株のほかにブリュフィナの13万8,000株を持っている。こうしてウーグレ・グループはローノワ・グループと緊密な関係を結び、その一重要部門となっている。

コフィナンデュスはさらにロダンジュの4万株、サンプル製鋼鉱山会社（Sté des Aciéries et Minières de la Sambre）の5万株も所有している。その他多くの会社や銀行にも参与している。

(2) ロダンジュ鉱山冶金会社（Sté Minière et Métallurgique de Rodange）

所在地はルクセンブルクで資本金は2億ルクセンブルク・フラン、製鋼能力は30万トンである。同社はウーグレ社と共同でオタンジュ鉱山会社（Sté des Mines d'Ottange）に参与している。なおこれにはジョン・コックリル社およびプロヴィダンス社も参与している（3社で3分の1ずつ所有）。

ロダンジュ社はアメルモン＝ドマリ鉱山会社（Sté des Mines d'Amermont-Dommary）にも参与している。

(3) ウーグレ貯蓄預金会社（Sté d'Epargne et de Dépôts d'Ougrée）

国王の勅令によってつくられた金融会社である。

(4) ウーグレ・マリエ株式会社（S. A. d'Ougrée-Marihayé）

いわゆる新ウーグレ社で、ベルギー国内の鉱山と工場とを引き継いだ。そして1935～36年にモンソー・シュル・サンプル工場をフォンテーヌ＝レベッグ（Fontaine-l'Evêgue）と合併させ、サンプル製鋼鉱山会社を創設した。この会社の株式5万株はすでに述べたようにコフィナンデュスの所有に属するが、新

ウーグレ社もまたこの会社に大きく参与している。

この新ウーグレ社はリエージュにほど近いウーグレに本拠があるベルギー最大の一貫会社の一つで、同国鉄生産の約17%、粗鋼生産の約20%を占め、欧州大陸最大の帯鋼メーカーである。

同社の株式資本は15億ベルギー・フラン、30万株で、このうち1万株がブリュフィナ、5万株がコフィナンデュスの所有に属する。すなわち全体の20%がコント・ド・ローノワ・グループに属している。

ウーグレ工場の主なる設備は、1高炉工場（高炉7基）、1平炉工場（平炉6基、各25トンないし35トン）、1電気製鋼所（電気炉2基、8トンおよび1トン）、1トーマス工場（転炉6基、各18トン）、コークス工場、圧延工場等がある。1951年には厚板工場および連続式広幅ストリップ工場の建設に着手し、これを完成させた。さらにウーグレには100万トンの製鋼能力に適応した規模の加工工場、セメント工場、タール工場、硫酸、煉瓦等の副産物工場、橋梁建築工場、鋳物工場、ブリキ製造工場等がある。

国内に炭坑および石灰石採掘場を持ち、フランスの鉄鉱山にも関係を持っている。

ウーグレ・グループには前述の諸会社のほかにウーグレ社直属の支配会社があり、それらは当然コックリル・ウーグレ合同体に引き継がれた。

#### i. サンプル製鋼鉱山会社

すでに述べたとおり、コフィナンデュスが同社の株式5万株を所有している。

1936年に現在の名称になったが、元来はこれより100年前にモンソー＝ベイモン製鉄（Hauts Fourneaux de Monceau-Bayemont）の名で創立された<sup>2)</sup>。資本金は4億ベルギー・フラン、株式は17万4,049株（無額面）である。

生産能力は製鋼30万トン、特殊鉄7万トン、四つの炭坑と一つの鉄鉱山とを所有している。圧延品は大体ウーグレと同様であるが、そのほかに帯鋼、冷間圧延形鋼等を製造している。

ii. ティール＝シャトー・エ・マルシネル鉄鋼会社（Hauts Fourneaux, Forges & Aciéries de Thy-le-Château & Marcinelle S. A., Marcinelle）

1891年に創立、資本金は3億4,000万ベルギー・フラン（無額面株12万6,000株）。1955年現在の生産能力は銑鉄36万トン、粗鋼35万トンで、圧延工場、コークス工場等を持っている。活発な近代化計画を遂行しており、生産能力はその後さらに拡大されている。また鉄鉱山および炭坑も支配している。

iii. ムーズ鋼管 (Usines à Tubes de la Meuse)

この会社にウーグレは22%参与しており、またコックリル社も大きく参加している。この会社はフランスのエスコー・エ・ムーズ社 (Sté Escaut et Meuse, ド・ヴァンデル・グループ) とも結びついている。

1911年に創立されたが、その起源は古く、1870年に早くもその鑄造工場がベルギー最初の熔接管生産を始めている。そして同社はベルギー唯一の各種鋼管の生産会社となった。1955年現在年間約15万トンの鋼管を生産する。資本金は2億ベルギー・フランである<sup>3)</sup>。

iv. シエール製鉄 (Sté des Hauts Fourneaux de la Chiers)

この会社はバりに本拠があるフランスの会社で、創立は1881年である。ウーグレ社はこの会社に25%の資本参加をしている。このほかにコフィナンデュスの持株20%、およびブリュフィナの持株4%と併せれば同社に対するウーグレの支配力は甚だ大きくなる。事実コフィナンデュス・ウーグレ・グループは、シエールの重役のポスト10のうち3を占めている<sup>4)</sup>。このほかインドシナ銀行 (フランス) 等多数の会社が同社に関係している。

同社は自分の鉄鉱山を持っているほかにフランスおよびルクセンブルクの多数の鉱山に参与している。またベルギーの炭坑会社ゼーブリュージュ・コークス会社 (Sté à Fours à Coke de Zeebrugge) にも参与し、必要なコークスを調達している。石灰石の山も所有している。製鋼量は60万トン以上、鉄鉱石生産は約70万トンである。

シエールはフランスのシデシャル<sup>5)</sup> (Sidérurgique de Participation et d'Approvisionnement en Charbon, Paris—SIDECHAR) に参与しているので、コックリル・ウーグレ合同体はこの会社を通じてシデシャルに参加しているわけで、そのためシエールはコックリル・ウーグレ・グループの重要な一環を

なしている。シデシャルはドイツ最大の炭坑会社の一つハルペン炭坑（Harpener Bergbau A. G.）を支配している。

v. その他ウーグレの支配網はさらに広くのびている。主として鉄鉱山および炭坑の支配に関係しているが、たいていの場合他の原料会社群と共同して参与している<sup>6)</sup>。

ウーグレ・マリエ・コンツェルンはウーグレ・マリエ社とその兄弟会社および直属の重要子会社の分だけで、その生産能力は鉄鉄、粗鋼ともそれぞれ300万トン以上に達する巨大コンツェルンである。計算に入らない多数の子会社および間接的支配下にある会社を含めると、その支配力はさらに龐大な量になる。

またその支配網はベルギー・ルクセンブルクのみならず、フランスやドイツにも伸びており、ド・ヴァンデル等の国際的コンツェルンとも関係を保っているのである。

このようにウーグレ・マリエはコックリルと並んでベルギー鉄鋼業をほとんど二分している重要なグループであった。

- 1) 以下主として *Handelsblatt*, 22 Juli 1955, *Continental Iron and Steel Trade Reports*, 12 Jan. 1960, による。
- 2) *Metal Bulletin*, March 1956.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Economie et Politique*, No. 5-6, 1954, p. 215.
- 5) シデシャルおよびハルペン炭坑については拙稿「フランス鉄鋼業とルールおよびザール」（名城大学『重工業研究』第6号、山田の筆名による）および「西歐国際重工業コンツェルンの発展」（『政経月誌』第47号、48号）参照。
- 6) *Usine Nouvelle*, 24 Fév. 1955, 参照。

## 第6節 コックリル・ウーグレ合同体の国際的支配の現状

ベルギー最大、最古の鉄鋼会社、ジョン・コックリルとウーグレ・マリエは合同して、フェルブラティルとともに、1955年6月27日にコックリル・ウーグレ社(S. A. Cockerill-Ougrée, Seraing)を創設した。彼らの大株主はコックリルではソシエテ・ジェネラルで20%、ウーグレ・マリエではブリュフィナおよびコフィナンデウスを含むローノワ財閥の3融資会社で20%、フェルブラティルではコックリルが56%を所有していた。

新会社コックリル・ウーグレの株式は138万株で、そのうち63万株はコックリルの旧株主に1対1の割合で、63万株はウーグレの旧株主に2対3の割合で、12万株はフェルブラティルの旧株主に5対3の割合で割り当てられた<sup>1)</sup>。

コックリルおよびウーグレはそれぞれ巨額にのぼる近代化のための投資を行っていた。両者の合同はこの投資をより容易に、より合理的に遂行させることを可能にし、生産能力を著しく増大させ、また設備の効率的な使用により生産性を上昇させることによって、より収益を増加させることができる。こうして、広大な単一の自由市場を実現した石炭鉄鋼共同体の中で他の加盟国の大コンツェルンとの競争に負けないだけの実力を持つことが可能になる。

これが両社の合同の目的だが、この合同運動を強くおし進めたのは彼らの背後にあるソシエテ・ジェネラルとコント・ド・ローノワ・グループであると考えられる<sup>2)</sup>。すなわちソシエテ・ジェネラルはコックリルをはじめとして、ベルギー第3の大鉄鋼会社プロヴィダンス、共同体最大の鉄鋼会社であるルクセンブルクのアルベッドその他の大株主であり、またローノワも同じくアルベッドその他の重工業企業の大株主であるため、コックリルとウーグレの合同は、西欧鉄鋼業界において重要な役割を果たしている大金融資本間の利益協定の結果であり、欧州共同市場における協働をめざすものであると考えられるのである。

表10-9 ベルギー鉄鋼企業粗鋼生産

(単位：万トン)

	1954年		1958年		1959年	
	生産能力	%	生産実績	%	生産実績	%
(1) コックリル・ウーグレ	192	36.9	196	33.1	204	32.1
(2) エノー＝サンプル	90	17.2	103	17.5	105	16.5
(3) プロヴィダシス	60	11.5	61	10.3	122	19.2
(4) ティール＝シャトー	54	10.3	31	5.2	203	32.2
(5) エスペランス・ロンド(Espérance Longdoz)	48	9.2	56	9.5		
(6) クラベック(Clabcq)	42	8.0	50	8.4		
(7) ボエル(Boël)	36	6.9	42	7.2		
その他			52	8.8		
合 計	522	100	591	100	634	100

出所：1954年はベ・エヌ・スースリン『鉄鋼業』邦訳89頁、1958、59年はMetal Bulletin, 2 Sept. 1960.による。

この合同によってできた新会社コックリル・ウーグレは、ひじょうに大規模な水平的・垂直的集中を実現した。この新会社は炭坑、鉄鉱山、コークス工場、製鉄鋼工場、圧延工場、線材工場、機械工場、造船所、セメント工場等を所有する。合併当時の従業員は約4万5,000人で、年間売上高は100億ベルギー・フランに上っている<sup>3)</sup>。

コックリル・ウーグレ社の1959年の粗鋼生産は204万トンに達した。これはベルギー粗鋼生産全体（634万トン）の約3分の1に当たる。ベルギー鉄鋼企業の粗鋼生産は表10-9のとおりである。

上位5社まではコックリル・ウーグレ・コンツェルンに属するものであり、結局ベルギー鉄鋼業はほとんど完全に同コンツェルンの支配を受けているのである。

しかし実際には新合同体の影響力はさらにはるかに大きい。すなわちその関係は国際的にも拡大しており、同コンツェルンのルクセンブルクおよびフランスにおける関係主要会社の生産能力ははっきりわかっているだけでも、銑鉄640万トン以上、粗鋼750万トン以上という歴大な規模に達しているのである。また所有あるいは支配する鉄鉱山および炭坑もベルギー以外にルクセンブルク、フランス、ドイツ等の近隣諸国に多数存在する。

コックリル・ウーグレ・コンツェルンは鉄鋼部門のみならず、原料から加工部門まで集中しているが、同コンツェルンがさらに大規模なソシエテ・ジェネラルおよびローノワ伯爵家の二大コンツェルンの傘下に入っていることによって、その重工業コンツェルンとしての厚みはさらにはるかに大きくなっている。

なかでもソシエテ・ジェネラルは銀行、炭坑、鉄鋼、機械、非鉄金属、繊維、化学、石油、セメント、ガラス、電気、輸送等広大な分野において支配力をふるっており、ベルギー領コンゴの経済もユニオン・ミニエール・デュ・オー・カタング社を通じて支配している。ベルギー経済はほとんどソシエテ・ジェネラルによって動かされているといっても過言ではない。

コックリル・ウーグレ・コンツェルンは、ことにフランスの代表的重工業コンツェルンとひじょうに緊密な関係を結んでいる。フランスのロスチャイルド銀行はシュナイダー・コンツェルン等重工業関係のコンツェルンと密接な関係を持っているのであるが、このロスチャイルド銀行がジョン・コックリルおよびプロヴィダンスとも関係を結んでおり、この両社に対してロスチャイルドの代表を重役に出していた。またフランス重工業に大きな支配力を有するパリ・オランダ銀行<sup>4)</sup>もコックリルに重役を派遣していた。

また金融会社を通じてのみならず、両国の重工業コンツェルン自身相互に直接関係している。すなわちシュナイダーの系列会社であるルクセンブルクのアルベッドには、前述のようにコックリルおよびソシエテ・ジェネラルも参与している。そしてアルベッドはそれ自身巨大な国際的重工業コンツェルンを形成しているのである。またコックリル・ウーグレが参与しているアディールも、フランスのシデロール・グループの支配下にあるルクセンブルクの会社である。

一方コックリル・ウーグレの子会社であるムーズ鋼管会社は、フランスのド・ヴァンデル・グループの中の重要な持株会社であるエスコー・エ・ムーズとも結びついている。コックリル・ウーグレ・コンツェルンの一員プロヴィダンスはその活動の約半分をフランスで行っているし、また同コンツェルンはフランスにある鉄鋼会社シエールに強力な参与を行っており、フランスの諸鉄鉱山、モロッコの北アフリカ炭坑会社(Charbonnages nord-africaines)等にも参

加している。

フランスおよびベルギーの重工業コンツェルンはこのようにして強力に浸透し、結合しあっている。そして彼らは一体となって国際的な一つの有機的重工業独占体組織を形成している<sup>5)</sup>。この大規模な国際的巨資本の連合体はフランスおよびベルギー・ルクセンブルクの鉄鉱山、炭坑（ただしフランスの炭坑は第2次大戦後ほとんど国有化されているため除外）、鉄鋼業のほとんど全部を支配し、機械工業にも強力に進出している。

こうした大資本間の国際的結合関係の一つの現われは1960年に明らかにされたベルギーの大規模な新製鋼所の建設計画である。これはベルギーのガン市とオランダのテルネーゼン港（Terneuzen）とを結ぶ運河沿いに年産粗鋼200万トンないし250万トンの一貫工場を建設しようとするものであり、将来は500万トンないし600万トンまで拡大が考えられていた。この計画にはベルギーのコックリル・ウーグレ、ルクセンブルクのアルベッド、フランスのシュナイダー・クルーゾー、クニユタンジュ、ノルマンデイの各社が参加している<sup>6)</sup>。いずれも前述のように緊密な資本的結合関係にあるもの同士で、こうした3カ国にまたがる協力計画が作成されることもしごく自然であるといえる。

さらにこの国際的重工業グループはフランス、ベルギー、ルクセンブルクの国内のみならず、近隣諸国および海外にも広く支配と結合の手をひろげており、世界の重工業において一つの重要な支配的勢力となっているのである。

1) *Usine Nouvelle*, 24 Fév. 1955.

2) *Continental Iron and Steel Trade Reports*, 12 Jan. 1960.

3) *Economie et Politique*, Mars 1955.

4) 第6章参照。

5) フランスの重工業コンツェルンについては、拙稿「フランス重工業の再編成と近代化」東洋大学『経済経営論集』第7号、「西欧国際重工業コンツェルンの発展」『政経月誌』第47号、48号等を参照。

6) *Metal Bulletin*, 15 Nov. 1960. *American Metal Market*, 30 Nov. 1960.



## あとがき

本書はすでに発表した拙稿に新たに手を加えて一書にまとめたものである。  
各章の初出論文は次のとおりである。

- 第1章 産業革命前におけるフランス製鉄業の発展  
東洋大学『経済経営論集』第51号，1968年。
- 第2章 19世紀前半におけるフランス近代製鉄業の確立——木炭から石炭への転換と生産費の構成及びフランス政府の産業政策の影響——  
東洋大学経済経営研究所『研究報告 1968年版』1969年。
- 第3章 19世紀前半におけるフランス重工業企業と工業金融の発展  
東洋大学『経済経営論集』第52号，1969年。
- 第4章 19世紀前半におけるフランスの鉄道と大資本の形成  
東洋大学『経済経営論集』第72号，1974年。
- 第5章 19世紀後半におけるフランス鉄鋼業の発展——企業集中運動と近代的大企業の成立——  
東洋大学『経済経営論集』第55号，1970年。
- 第6章 フランス金融資本の形成——第2帝政期を中心とした鉄道、重工業、銀行の発展——  
東洋大学『経済経営論集』第76号，1975年。
- 第7章 国際的重工業コンツェルンとしてのSchneider Groupの史的発展  
東洋大学『経済経営論集』第7号，1957年。
- 第8章 フランスの国際的重工業コンツェルン，ド・ヴァンデル——その歴史的発展と独占の支配の現状——(1)(2)  
『政経月誌』第51号，第52号，1958年。
- 第9章 西欧の典型的な国際的重工業コンツェルン ARBED

『政経月誌』第54号，1959年。

第10章 ベルギーの国際的金融資本ソシエテ・ジェネラルとその傘下の重工業  
 コンツェルン，コックリル・ウーグレ——その歴史的発展の研究  
 ——(1)(2)

東洋大学『経済経営論集』第22号，第23号，1961年。

ヨーロッパ鉄鋼業の生成の歴史をたどってみると、原始的な状態からしだいに近代的な大企業が発展していく過程で、技術的、経済的、社会的、そして政治的諸問題に真摯に取り組んだ企業人の苦闘が、今日のヨーロッパ経済の基礎を築き上げたことがわかる。時代の流れの中で次々に起こる新しい事態に対処し、問題を解決するためのさまざまな工夫が、新しい技術、大規模な経営、近代的な経済金融機構、より複雑な企業間組織を生み出していった。そして鉄鋼企業の活動は早くから資本の要請の赴くままに、炭坑業、鉄鉱山、機械工業等の関連産業にも拡大し、また国家の枠を越えた国際的支配網、連携関係をつくり上げていった。欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）成立以前に、産業の実体においては、すでに早くから国家を超えた活動が、必然的に追求されてきていたのである。

ヨーロッパ最初の経済統合体である欧州石炭鉄鋼共同体は、官僚や政治家等の単なる机上の産物ではなく、長い歴史的発展の中で形成されてきた「ヨーロッパ鉄鋼業」という、ある意味で一つの有機体とも言えるものが存在していたことが、その成立の前提となっていたと行うことができよう。本書においては、第2次世界大戦直後の時期までについて検討したが、その後の発展については、前掲拙著『欧州鉄鋼業の集中と独占』に連続することになる。なお最近に至るまでのヨーロッパ鉄鋼業およびECSCの発展については引き続き研究を一書にまとめたいと思っている。

## 索引

## 【あ】

アーヘン……………244, 251, 273  
 アヴィニヨン～マルセイユ鉄道……………101, 107  
 アヴェイロン……………56, 69, 113  
 アヴェイロン炭坑製鉄会社……………69  
 アディール……………243, 247, 250, 253, 287, 295  
 アトリエ・ド・ヴェニシウ……………193  
 アニアンズ……………10  
 アムステルダム……………60, 164, 185, 273  
 アメルモン=ドマリ鉱山会社……………289  
 アライド・ケミカル……………261  
 アルザス……………10, 13, 84, 88, 110, 117, 122, 149, 150, 182, 216  
 アルジェリア……………101, 125, 131, 186  
 アルジェリア産鉄鉱石……………119  
 アルゼンチン……………188, 252  
 アルデンヌ……………71, 228  
 アルドワーン……………82  
 アルベッド……………192, 199, 200, 230, 238, 239, 241-253, 256, 293, 295, 296  
 アルレ=デュフル……………161  
 アレ……………36, 56, 61, 68, 70, 71, 101, 113  
 アレーホーケール間……………68, 91  
 アレ鉱山製鉄会社……………69, 127, 159  
 アングラール・アチュ……………282  
 アングラール・アチュ=グリーヴニエ製鋼株式会社……………282  
 アンザン……………56, 107, 123  
 アンザン鉱山……………67  
 アンシャン・レージュム……………4, 5, 16, 19, 51  
 アンドレ……………206, 207  
 アンドレ島……………177  
 アンドレ・エ・コティエ……………69  
 アンドレ・エ・コティエ銀行……………60  
 アンドレジュ……………38, 79, 81  
 アンドレジュ～ロアンヌ鉄道……………82  
 アンドレジュ線……………81, 82

アントワープ……………263, 271, 272  
 アンファンタン……………92  
 アンフィ……………29, 39, 56, 80, 113, 149  
 アンフィ製鉄会社……………194  
 アンベック社……………194  
 イギリス産業……………89  
 イギリス資本……………89, 108, 157  
 I. G. ファルベン……………261  
 イタリア……………54, 61, 200  
 イングランド銀行……………5  
 インドシナ……………235  
 インドシナ銀行……………291  
 インベリアル・ケミカル……………261  
 インランド・セメント……………259, 260  
 ヴァサル……………69  
 ヴァランシエンヌ……………67  
 ヴァルガ……………234  
 ヴァンダビルト……………174  
 ヴァンデル, ジャン・マルタン……………204  
 ヴァンデル家……………204  
 ヴァンデル・セリリ社……………207  
 ウイーン……………157  
 ヴィヴォー……………13  
 ヴィエイユ=モンターニュ……………247  
 ウィリアム1世……………268, 270, 277  
 ウィルキンソン, ウィリアム……………177, 206  
 ウィルキンソン, ジョン……………28, 177, 264  
 ウィルソン……………56  
 ヴィルフォックス……………45  
 ヴィンタースラク炭坑……………193  
 ヴーヴ・ドマ=シ銀行……………197, 233  
 ウーグレ・マリエ株式会社……………288, 289  
 ウーグレ・マリエ社……………244, 259, 261, 275, 282, 288, 291, 292, 293  
 ウーグレ社(旧)……………288  
 ウーグレ社(新)……………289, 290  
 ウーグレ製鉄会社……………288  
 ウーグレ炭坑製鉄会社……………273, 276, 279, 288

- ウーグレ貯蓄預金会社……………289
- ウェールズ……………37, 85, 122
- ウエスティングハウス……………194
- ウエストファリア……………127, 213, 218
- ヴェムランジュ, プラトー・ド……………207
- ヴェルヴィエ……………265-267, 273, 274
- ヴェルサイユ鉄道……………107
- ヴェルサイユ〜レンヌ鉄道……………143
- ヴェルヌ, F.……………159
- ヴォージュ……………10, 62
- ウタラン炭坑株式会社……………285
- ウトロー……………118, 129
- 運河……………37, 38, 47, 61, 65, 85, 99, 160
- 運河建設計画……………38
- 運河建設時代……………105
- 英仏通商条約……………150, 151, 223
- 英仏貿易協定……………209
- 英蘭銀行……………208
- エース=サンプル=ムーズ……………266
- エジプト……………164, 274
- エシュヴァイラー鉱山……………253
- エシュヴァイラー鉱山連合……………244, 251, 252
- S. O. M. U. A.……………193
- エスコー・エ・ムーズ社……………229, 230, 291, 295
- エスペランス……………276
- エスペランス=ロンド……………282, 288
- エズモン採石精錬……………285
- エッケル……………31
- エッシュ工場……………243
- エッシュ製鉄合資会社……………239, 241
- エノー……………263, 266
- エノー=サンプル製鋼会社……………247, 281, 284, 285
- エノー社……………281, 284
- エノー電力連合株式会社……………285
- MM・ド・サンティニオン社……………128
- MM・マルク・ラティ社……………128
- エヤンジュ……………14, 27, 29, 36, 53, 99,  
113, 118, 122, 127, 147, 179, 183, 204, 205, 207,  
211-213, 215-218, 226, 228
- エルヴィル株式会社……………250
- エルヴェルタ社……………251
- エルシュトラン・エ・ゾルデ炭坑……………193,  
251, 253
- エレクトロ=メカニック社……………232
- 塩基性製鋼法(トーマス法)……………119
- 塩基性転炉工場……………239
- 塩基性転炉法……………116
- 塩基性ペッセマー転炉……………282
- 欧州共同市場……………203
- 欧州経済共同体(EEC)……………19, 203, 204,  
235-237, 255
- 欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)……………130, 131, 192,  
200, 203, 235-237, 281, 293
- 欧州統合運動……………20, 203, 235, 236, 245
- 王立アンドレ・モンスニ製造・  
レーヌ・ガラス製造会社……………208
- 王立火砲製造工場……………177, 206
- 王立工場……………4
- 王立製鉄工場……………206
- 王立発券銀行……………207
- オーギュスト・メッツ社……………239
- オーケリー……………264
- オーストリア……………61, 157, 159, 205, 251, 263, 266
- オーダンクール……………36, 56
- オート・パンク……………42, 60, 61, 63, 66, 67,  
71, 73, 75, 91, 100, 105, 108, 153, 155-158, 165,  
185, 222
- オート・プレジジオン光学機械……………193
- オート・マルヌ県……………117, 121, 150
- オーバン……………36, 159
- オーブリヴ・ヴィルリュ製鉄会社……………199,  
245, 250, 253
- オーベルト……………14
- オシェ, J.……………101
- オスタンードーバー航路……………275
- オタング……………42, 53, 60, 71, 91, 163, 185, 221
- オタンジュ……………204
- オタンジュ鉱山会社……………289
- オディエ……………41, 90
- オビー……………129
- オムニウム……………63
- オメガ社……………193
- オメクール……………125
- オメクール工場……………122
- オランジュ=ナッソー炭坑……………231, 232
- オランダ……………4, 43, 54, 159, 164, 176, 219, 231,  
232, 263, 264, 269, 270-272, 277, 296
- オランダ領ギアナ……………273
- オルレアン……………85, 90
- オルレアン〜プールジュ

シャトルー鉄道……………180

【か】

カーネギー……………174  
 カーン……………119, 159, 162  
 カヴァリエ……………250  
 カヴァリエ・グループ……………199, 250  
 カウバー……………122  
 カタラン法……………29  
 カタンガ……………260  
 カナダ……………188, 247, 248, 259, 260  
 カナディアン・ベトロフィナ……………248, 260  
 下部構造……………88  
 株式会社……………54-58, 64, 145, 160, 208, 273, 275  
 株式会社形態……………54, 74, 94, 105, 154  
 株式会社制度……………53, 54-56, 58, 64, 78, 116  
 株式会社組織……………14, 58, 105  
 株式銀行……………161, 165  
 株式合資会社形態……………155  
 株式合名会社……………55, 56  
 株式市場……………94  
 株式取引所……………55, 59, 61  
 貨幣制度……………19, 59  
 カメルーン……………260  
 ガリエラ公爵……………160  
 ガルシア, ローラン……………39  
 カルテル……………124, 126, 221  
 カルノー・バス=アンドル製鉄……………199  
 カルボシミック……………248, 259  
 カレー……………90, 118  
 カレー=サン=ポール……………101  
 カレット……………68  
 カロルス・マグヌス……………128  
 ガン……………128, 272, 274, 296  
 関税……………18, 46, 111, 209  
 関税障壁……………5, 214, 271  
 関税政策……………42-44, 46  
 関税同盟……………243, 244  
 関税保護……………45  
 カンバーランド……………118  
 カンピヌ……………127, 128, 193  
 カンピヌ炭田……………267  
 含隣鉱石……………119  
 北アフリカ……………125  
 北アフリカ炭坑会社……………295

北スペイン……………118  
 北フランス……………124, 128, 219  
 キャメロン……………73, 74  
 共同市場……………131, 203, 204  
 金庫……………153  
 禁止の関税……………12, 45  
 金属電機事業 (TEM)……………198  
 近東……………164  
 クイエ……………276, 284  
 グーニオン製鉄……………229, 230  
 グーベン……………268, 273  
 クニユタンジュ製鉄会社……………191, 192,  
 197-199, 225, 226, 296  
 グビー……………69  
 グライヴィッツ……………213  
 クラップム……………24, 26, 31, 120, 266, 271  
 グラン・サントラル……………143, 157, 158  
 グラン=コンブ……………101  
 グリーヴニエ工場……………282  
 グリュンベルク……………268, 273  
 クルップ……………62, 218, 220  
 グルノーブル……………4, 60  
 グルバン不動産グループ……………287  
 クレスバン……………67, 127  
 クレックナー……………191  
 クレディ・デュ・ノール……………154, 198  
 クレディ・フォンシエ……………64  
 クレディ・モビリエ……………62, 64, 106, 153,  
 155-163, 174, 185, 277  
 クレディ・リヨネ……………161, 185, 187  
 グロスーヴル……………29  
 クロムウェル……………5, 208  
 グロメニル……………70  
 クロントリ・エ・トレフィルリ……………244  
 経済統合運動……………169, 176, 237, 238, 255  
 経済統合体……………200  
 ゲーテ……………211  
 ケーニヒスヴァルター……………164  
 ケクラン, アンドレ……………62  
 ケクラン, ニコラ……………84, 92  
 ケス・ジェネラル (鉄道一般金庫)……………159  
 ケス・デ・コント・クーラン……………19  
 ケス・デスコント……………19  
 ケス・ラフィット……………64  
 ゲルゼンキルヘン鉱山会社……………225, 244, 250

兼営銀行……………155,173  
 原子力研究シンジケート……………287  
 ケント……………128  
 原料域内取引……………131  
 原料自給……………124,126  
 原料資源……………123,124,182  
 原料支配……………131  
 鉱山検査官……………48  
 鉱山検査官制度……………47  
 鉱山採掘権……………13  
 合資会社……………55,58,64,74,104,160,179  
 合資会社形態……………154  
 鋼鉄組合……………218  
 合同製鋼……………243  
 鋼の時代……………115  
 広幅ストリップミル……………198,230  
 合名会社……………54  
 コークス組合……………126  
 コークス高炉……………11,21,27,28,30,95,  
 111,112,177,179,206,213,216,269,270  
 コークス製鉄……………11,21,28  
 コークス精錬……………31,205  
 コークス鉄……………10,124,147  
 コークス炉……………181  
 コート……………10,12,21,213  
 コート・ドール……………44  
 コール・デ・ボン・エ・シヨセ  
 (土木局)……………80,83  
 国債……………60,185  
 国際鉄鋼カルテル……………200,235  
 国内工業奨励協会……………17  
 国有化……………129,141,232,296  
 国有鉄道……………145  
 小島精一……………114  
 個人銀行家……………153,166  
 個人金融業者……………153  
 国家的鉄道建設……………40  
 コックリル……………268,270,276,278,  
 280-281,284,287,288,289,291,292  
 コックリル, ウィリアム (父)……………264-268  
 コックリル, ウィリアム (息子)……………265,  
 267,268,273  
 コックリル, ジェームズ……………264,265,267,  
 268,270,273  
 コックリル, ジョン……………264,266-275,282,283

コックリル・ウーグレ……………243,247,248,253,  
 256,259,260,262,282,283,296  
 コックリル・ウーグレ・グループ……………261,  
 285,291,294,295  
 コックリル・ウーグレ合同体……………290  
 コットブス……………268,273  
 コフィナンデュス……………288-291,293  
 コマントリー……………123  
 コマントリー・フルシャンボー……………127  
 コマントリー・フルシャンボー・エ・ドカズヴ  
 イル……………194  
 コミテ・スペシアル・デュ・カタンガ……………260  
 コミテ・デ・フォルジュ (フランス  
 鉄鋼連盟)……………234,235  
 コリュメタ……………251  
 コルベール……………4  
 コロンビエ……………13  
 コンゴ……………247,260,261  
 コンセシオン……………88,91,92,142,144,215,218  
 コンソルチウム……………82,128  
 コント・ド・ローノワ (ローノワ伯爵)……………248  
 コント・ド・ローノワ・グループ……………249,290  
 コントワール・デスコント……………64,164  
 コントワール・デスコント・グループ……………164  
 コントワール・デスコント・ド・パリ……………163,  
 164

## 【さ】

採掘権……………239  
 ザール……………118,150,192,200,219,225,232,245  
 ザール鉄鋼業……………224  
 ザールブリュック社……………242  
 ザクセン……………145  
 サファク社……………244  
 産業革命……………20,22,51,141,173,  
 174,177,180,209,212,214  
 産業合資会社……………63,106  
 産業政策……………24,42  
 産業動産銀行 SOVAC……………188  
 産業投資……………106,166  
 産業保護政策……………42  
 サン＝ジェルマン鉄道……………107  
 サン＝シモン……………63  
 サン＝シモン主義者……………83,91,155  
 サン＝シャモン……………125

サン=スラン・シュル・リスル……………113  
 酸性法……………118  
 サン=テチエンヌ……………4, 27, 29, 36, 38, 39, 70,  
 79-82, 96, 99, 100, 113, 117, 119, 122, 190, 213  
 サン=テチエンヌ=アンドレジュ線……………40, 90, 98  
 サン=テチエンヌ=リヨン鉄道……………80, 81, 99, 100  
 サン=テチエンヌ鉄鉱山会社……………57, 68  
 サント=ジャーム, ボウダール・ド……………207,  
 208  
 サントル……………117  
 サントル運河……………177, 206  
 サンプル……………263, 266  
 サンプル・エ・モーゼル社……………281, 284  
 サンプル河……………266  
 サンプル製鋼鉱山会社……………289, 290  
 サン=マルタン製鉄会社……………252  
 サン=ユベール……………67  
 サン=ルイ……………118  
 シーメンス, ウィリアム……………113, 214  
 シーメンス=マルタン法(平炉法)……………112, 113,  
 118, 119, 147, 148, 214, 216, 221  
 ジヴォール運河……………39  
 ジヴォール運河会社……………81  
 J.J. カルノー……………229, 232  
 J.J. カルノー・バス=アンドル製鉄……………229, 230  
 シェール製鉄会社……………285, 291, 295  
 ジェネラル・クレジット・カンパニー……………164  
 ジェネラル・サンダー=鉱山会社……………285  
 ジェネラル保険会社……………61  
 シオニ・エ・ビオレ社……………265  
 事業銀行……………105, 161, 162, 174,  
 185-188, 221, 234, 277  
 資源の支配構造……………129  
 資源問題……………130  
 シシリー……………64, 72  
 私人銀行……………5, 71, 174, 208  
 私人銀行家……………60, 174  
 シデシャル……………291, 292  
 シデロール……………191, 197, 198, 230, 250  
 シデロール・グループ……………199, 231, 232, 253, 295  
 清水貞俊……………130  
 シモン……………162, 163  
 シモニ社……………266  
 シモンズ, J.C.……………273  
 ジャール, ガブリエル……………10, 11, 205

シャイヨー……………62  
 ジャクソン, Ch.……………101, 113  
 ジャズ……………193  
 シャティヨン……………36  
 シャティヨン=コマントリー……………113, 125,  
 127, 149, 161, 191  
 シャティヨン=シュル=セース……………44  
 シャテリノー……………284  
 シャトリユ……………160  
 シャプタル=ボーダン……………69  
 シャフハウゼン銀行……………186  
 シャラントン……………29, 56  
 シャリュ銀行……………189  
 ジャルニー=鉱山……………228  
 シャルルヴィル……………129  
 シャルルロワ……………106, 266, 267, 272  
 シャルルロワ地域電力グループ……………285  
 シャルルロワ電機製作所……………247, 259  
 シャロレ運河……………177, 206  
 シャロン=シュル=ソヌ製造工場……………181  
 シャロン=シュル=ソヌ造船所……………182  
 ジャンダルム……………126  
 シャンパーニュ……………45  
 シャンパーニュ冶金株式会社……………287  
 シュヴァリエ, ジャン……………182  
 自由通商条約……………110, 181, 214  
 自由貿易政策……………110  
 ジュフ……………226, 228  
 シューマン, ロベール……………235  
 シューマン・ブラン……………19, 176, 254, 255  
 シューマン共同体……………237  
 シュザンジュ……………14  
 シュタインフォルト……………243  
 シュタインフォルト鉄鋼会社……………287  
 シュナイダー……………57, 62, 122, 123, 125, 152,  
 158, 162, 163, 177, 180-185, 194, 197, 198, 211,  
 212, 222-226, 230, 233-235, 243, 245, 248, 250,  
 256, 270  
 シュナイダー, アドルフ……………179  
 シュナイダー, ウージェーヌ……………179, 211  
 シュナイダー, シャルル……………192, 249  
 シュナイダー・エ・コンパニー……………189, 190,  
 192, 218  
 シュナイダー・クルーゾー……………296  
 シュナイダー・グループ……………175, 176, 187,

189-192, 195, 197, 199, 200, 238, 249, 252, 295
シュナイダー兄弟……………117, 179
ジュネーヴ……………99
ジュネフ……………183, 218, 219
ジュリアン、アドルフ……………92
商業鉄道一般金庫……………101
証券市場……………64, 73, 169
商工業一般金庫……………64, 104
商工業銀行 (C. I. C.) ……161, 195
商工業信用一般銀行……………185
上部構造……………88
植民地不動産銀行……………164
植民地不動産信用銀行……………188
ジョン・コックリル……………288, 289, 293, 295
ジョン・コックリル社……………243, 259, 261, 275
ジルソン・グループ……………285
ジロンド製鉄造船……………193
ジロンド造船所……………182
シンジケート……………158-160, 235
森林統制……………47
スイス……………54, 60, 159, 161, 162, 193, 224, 251
スイスの銀行……………60, 68
水路……………35-38, 47, 85, 99, 118
スウェーデン……………9, 27, 118
スースリン……………235
スール元帥……………69
スエズ運河……………235
スクリヴナー……………11, 21, 29, 44, 46, 93
スクレサン……………107, 272, 276
スクレサン炭坑会社……………273
スコダ兵器工場……………187
スコットランド……………205
スタンダール……………62
ステイーヴンソン、ジョージ……………39
ステイランゲン=ヴァンデル……………122, 215
ステイラン工場……………152
ストックトン=ダーリントン鉄道……………79, 80
ストラスブル=バーゼル鉄道……………84, 92, 101
ストリップ・ミル……………284
スネル=モーヴージュ……………128, 228, 230
スパ……………267, 273
スペイン……………9, 43, 54, 61, 125, 159, 200, 235, 261, 264, 274
スペイン鉱……………118
スベーター家……………186

スラン……………264, 268, 270, 275
スラン工場……………269-275, 278, 282
スラン城……………268
スレ……………67
スレ・ルリエーヴル社……………57
セイエール……………57, 60, 62, 71, 72, 179, 184
セイエール銀行……………70
セイエール家……………71
セイエール・ニコラ……………60
西部鉄道……………143, 157
セー、アンリ……………16, 23, 182
セーヌ右岸……………84
セーヌ河……………100
セーヌ左岸……………84
ゼーブリュージュ・コークス会社……………291
ゼーラント・コークス協同組合……………129
セガン、マルク……………80, 100
セガン兄弟……………39, 80, 99
石炭委員会……………234
セメント練瓦合同……………247
セリリ、メグレ・ド……………208
セレマンジュ……………230
セント・ペテルスブルク……………275
1859年新鉄道法……………144
1842年鉄道法……………88, 91
ソースヌドゥー間……………37
ソース=ライン運河……………37
ソース河……………100, 177, 206, 277
ソシエテ・コマンディテール・ド・ランデュストリ……………155
ソシエテ・ジェネラル……………102, 161-165, 185, 248, 253, 259-262, 271, 276, 277, 284, 285, 287, 293, 295
ソシエテ・ジェネラル・デ・バイ=バ……………257, 277
ソシエテ・ジェネラル・ド・ベルジーク……………68, 185, 192, 222, 244, 247, 249, 253, 256, 257, 277
ソシエテ・ジェネラル・プール・ファヴォリゼ・ランデュストリー・ナショナル……………257, 277
ソシエテ・ド・トラクシオン・エ・エレクトリシテ……………259
ソシエテ・レ・プティ=フィス・ド・フランソワ・ド・ヴァンデル……………197
ソジェミス社……………248, 260



ソラック	198, 199, 230
ソラック・グループ	232
ゾリンゲン	8

## 【た】

ダーナム	11, 12, 24, 74, 85
ダービー、アブラハム	20
ダービー 2 世、アブラハム	28
大陸租鋼カルテル	241, 245
大陸封鎖	19, 20
大陸封鎖政策	20
ダヴィリエ	41, 68, 106, 162
ダシエ, A.	159
タラボ, ポーラン	57, 92, 101, 102, 104, 107, 158, 162
タラボ・グループ	164
タラボ兄弟	107
タラボ家	57
タラボ P. L. M. グループ	164
ダルベール公爵	70
ダンケルク	91, 119
炭坑支配	232
チェコスロバキア	187, 224
チオンヴィル	285
地中海製鉄造船	182
中央銀行	60, 234
中部	117, 123, 127, 157, 161, 177
中部地方	27, 38, 96, 99, 117, 125, 129, 182, 219, 226
中部鉄道会社	90
中部ライン銀行	186
チューリンゲン	211
チュニジア	186
チリ	224
通商条約	16
ティール=シャトー・エ・マルシネル 鉄鋼会社	290
ティアン	263
ディートリッヒ工場	10
ディートリッヒ男爵	9-11, 52
ティヴァンセル	67
ディジョン	74, 102
ディジョン=ブザンソン	101
低地諸国	257, 269
ティッセン	217, 220

ティッセン・グループ	190
ディフェルダンジュ・サン=アング ベール=リュメラング鉄鋼株式会社	243
ディフェルダンジュ工場	287
ディフェルダンジュ製鋼所	240
ティボー	163
ティラール	272, 283
ディラン	230
ディリンゲン製鉄会社	287
低燐の鉄鉱石	118
テール・ルージュ鉱山会社	225, 243, 245, 249, 250, 253
テール・ルージュ製鉄会社	192, 243, 244, 248
テール・ルージュ冶金会社	225
テールノワール	27, 39, 80, 101, 113, 122, 149
手形割引銀行	154
デクタル	41, 83, 106
デストルノ	74
鉄鉱石貿易	125
鉄道	38, 39, 57, 61, 65, 72, 77, 79, 80, 81, 85, 86, 91, 94, 96, 98, 105, 106, 111, 118, 141, 159, 160, 162, 174, 181, 212, 214
鉄道建設	39, 40, 53, 78, 82, 85, 87, 93, 101, 157, 158, 180, 212, 216
鉄道建設距離	97
鉄道政策	86, 145
鉄道発展計画	147
鉄道網	39, 40
デマーシ	235
デュク・ド・ボルドー運河	82
デュスリエ社	194
デュデランジュ製鉄会社	239, 240, 242
デュデリンゲン	186
デュフォー	29
デュボワ	271
デュラン, F.	159
デュルネサン	41, 71, 83
テルネーゼン	129
テルネーゼン港	296
転炉製鋼法	214
ド・ヴァンデル	7, 10, 14, 29, 62, 118, 122, 123, 127, 152, 175, 177, 179, 180, 182, 183, 185, 191, 198, 199, 205-209, 211, 212, 215, 220-227, 231, 233, 235, 238, 243, 250, 251, 253, 270, 292
ド・ヴァンデル, アンリ	218

ド・ヴァンデル, イニヤース……………14, 211  
 ド・ヴァンデル, シャルル……………14  
 ド・ヴァンデル, フランソワ……………224, 234, 235  
 ド・ヴァンデル, フランソワ=イニヤース  
 ……………205, 211-213, 218  
 ド・ヴァンデル, ボール・フランソワ・  
 アンリ……………218  
 ド・ヴァンデル, マルグリット……………14  
 ド・ヴァンデル, マルタン……………129  
 ド・ヴァンデル, ユンベール……………224  
 ド・ヴァンデル, レ・プティ・フィス・  
 ド・フランソワ……………197, 218, 227, 228  
 ド・ヴァンデル・エ・コンパニー……………218,  
 227, 228  
 ド・ヴァンデル・グループ……………197, 230,  
 233, 291, 295  
 ド・ヴェムランジェ……………208  
 ド・ガロワ……………29, 38, 57  
 ド・ネルヴォ……………186, 191, 194  
 ド・ネルヴォ家……………198  
 ド・ブジェール……………100  
 ド・ブスケ……………100  
 ド・ベイエリムホーフ……………234  
 ド・ラ・パノツェ將軍……………224  
 ド・レンスヴィル……………100  
 ドイツ銀行……………186  
 ドイツ炭坑……………131  
 ドイツ・ルクセンブルク……………243  
 ドヴィエース……………68  
 投資銀行……………63, 66, 156, 257  
 統制的経済政策……………17  
 統制的政策……………22  
 東部……………119, 123, 129, 152, 226  
 トウフェール, ピエール……………206  
 東部鉄道……………143, 152, 157  
 東部鉄道会社……………212  
 同盟開発社……………188  
 道路体系……………85  
 道路網……………18  
 トーマス・ギルクリスト……………119  
 トーマス鋼……………191, 287  
 トーマス工場……………290  
 トーマス製鋼法……………150, 182,  
 217, 221, 239, 240, 242, 278  
 トーマス炉……………218, 219, 284

ドカズ……………69  
 ドカズヴィル……………53, 69, 70, 72,  
 106, 127, 152, 159, 182  
 独領ロレーヌ……………218  
 ドコヴィル・エネ……………231  
 ドシズ……………127, 182  
 ドナン……………57, 123, 182  
 ドナン・アンザン製鉄所……………118, 124, 127,  
 128, 149, 152, 158, 198, 219  
 ドナン・アンザン製鉄鍛造会社……………58, 101  
 ドニエール……………162, 163  
 ドフィネ……………8  
 土本局……………38, 80, 145  
 土本産業会社……………190  
 ドマーシ・エ・セイエール社……………218  
 ドマーシ銀行……………222, 224, 233  
 ドメルダンジュ製鉄工場……………240, 242  
 ドラント……………68, 69, 99, 100, 160  
 トランスアトランティック社……………163  
 トリニャック……………119  
 ドルイヤール……………71  
 トルコ……………157, 274  
 トルコ貿易会社……………194  
 ドルフュス・ミーク社……………62  
 トレヴィシック, リチャード……………39  
 ドレスデン銀行……………186  
 ドレセル……………60  
 ドロワ=マティアン製板会社……………284  
 ドロワトモン……………125  
 ドロワトモン=ブリュヴィル鉱山会社……………190

## 【な】

ナポレオン1世……………17-20, 48, 54, 59, 60  
 ナポレオン3世……………64, 110, 141, 142,  
 154-156, 181, 212, 214  
 ナポレオン時代……………18, 55, 62, 86, 263  
 ナポレオン戦争……………23  
 ナミュール……………263, 270, 272  
 南海泡沫会社……………54  
 ナンシー……………13, 215  
 ナンシー鉱床……………124  
 南西部……………121  
 ナント……………158, 177  
 南部……………14, 107, 157  
 ニールソン, ジョン・ピアモント……………28

ニユーヴル	90
西カナダ石油	188
西カナダ炭坑	188
ニューコメン	21
ヌーヴメゾン	125
ヌフリーズ、ヴェルヌ・ド	159, 221
ヌフリーズ銀行	60
ネーデルランド	266, 273
熱風知	95
ネラン	101
ネルヴォ	234, 235
ノイエ・フリードリヒシュトラッセ	268
ノール	17, 27, 32, 67, 88, 117, 123, 127, 150
ノール・エ・エスト製鋼所	128, 198
ノール県	117, 150
ノール炭田	67, 80
ノッティンガム	266
ノルマンディ	89, 124, 192, 296
ノルマンディ製鉄会社	190, 198, 226

## 【は】

ハイチ	72
バド=カレー	32, 219, 232
バド=カレー炭田	266
バースター、コンラッド・グスタフ	264, 274, 275
ハインリッヒ・ロバー	232
バウンズ	8, 11, 120
バス・アンドル	119
バックール=デュフル	159, 161, 162
発券銀行	19, 59, 184, 257, 277
発券独占	59
発券の独占権	19, 156, 184
バッシー	17
バディカム・アンド・アルカード社	89
バディニヨール	107
ハドソン、ジェームズ	266
バドル鉄	29, 43, 112, 113, 148
バドル法	10, 12, 21, 28, 29, 95, 112, 147, 213
バドル用銑鉄	239
バドル知	269
バブル・アクト	54
ハム	128
ハム大炭坑	217
バラヴェ	69, 70

原輝史	166
バリ	19, 39, 40, 56, 59-61, 67, 69, 71, 80-84, 86, 88-91, 103-105, 108, 120, 149, 153, 154, 185, 186, 206, 222, 274, 291
バリ・ウトロ製鋼	229
バリ・オランダ銀行	185, 186, 188, 198, 238, 295
バリ・コンミュン	110
バリ=ヴェルサイユ鉄道	41, 84, 180
バリ=オルレアン=ボルドー線 (P.O. 鉄道会社)	143, 152, 159, 162, 163
バリ=オルレアン鉄道	41, 71, 90, 92, 99, 100, 104, 158, 180
バリ=コルバイユ鉄道	84
バリ=サン=ジェルマン鉄道	41, 83, 84, 106, 180
バリ=ストラスブール鉄道	89, 97, 107, 143
バリ=ブローニュ鉄道	180
バリ=ブリュッセル鉄道	180
バリ=リヨン=地中海線 (P. L. M. 鉄道)	102, 143, 152, 158, 162, 163
バリ=リヨン=マルセイユ鉄道	91
バリ=リヨン鉄道	89, 92, 102, 107, 143, 152, 158
バリ=リル鉄道	90
バリ=ルーアン=ル・アーヴル線	84, 180
バリ=ルーアン線	85, 180
バリ=ロンドン間	91
バリ	265
バリ銀行	164, 185
バリ合同銀行	185-189, 198, 222, 233, 235
バリ市場	150
バリ商業会議所	163
バリ証券取引所	65
バリ人	106
バリ水道	54
ハリマン	174
バルセロナ	273
バルトロニー	41, 90, 99, 100-102, 104, 158, 159, 162
バルトロニー、フランソワ	90, 159
バルバンソン、アドリアン	247
バルバンソン、ガストン	239, 241
バルバンソン家	192, 241, 247
ハルバン炭坑	198, 292

- バルマード……………62  
 バロー……………9,18  
 ハンガリー……………61,187  
 バンク・ジェネラル・ド・クレディ……………187  
 バンク・デ・ベイ・デュ・ノール……………187,188  
 バンク・ド・クレディ・エ・ド・  
   デポ・デ・ベイ=バ……………164  
 バンク・ド・パリ・エ・デ・ベイ=バ……………99,  
   164,234  
 バンク・ド・ベイ=バ……………164  
 バンク・ド・ラ・ソシエテ・  
   ジェネラル・ド・ベルジーク……………258  
 バンク・パリジェヌ……………185  
 バンク・ロワイヤル……………19  
 ハンブルク……………265  
 ハンプロック……………189  
 汎ヨーロッパ運動……………19  
 ビエ=ヴィル……………41,69,71,90  
 ビエルコット……………274  
 ビオ, エドアル……………39,80,81  
 東印度会社……………207  
 ビシヨフスハイム……………164  
 ビナール……………163-165  
 ヒル……………174  
 ヒルファーディング……………173  
 ファーバー, ヨハン・ヤコブ……………209  
 ファベール……………13  
 ファン……………70  
 フィリップ, ルイ……………38,62,180,212  
 フィルミニ……………149  
 ブーヴィエ……………166,167  
 フーゴ・スチネス……………186  
 フール……………69  
 フール=オッペンハイム……………163  
 ブローニユー……………91,118  
 フェール……………162  
 フェニックス薄板珪瑯工場……………285  
 フェニックス社……………285  
 プエノスアイレス……………252  
 フェルテン・ウント・ギヨーム・  
   カルスヴェルク社……………244,251  
 フェルブラティル……………283,284,293  
 フォーゲルシュタイン……………173  
 フォード……………174  
 フォンテーヌ=レベッグ……………289  
 ブカン……………119  
 ブキエ……………71  
 武器工場……………131  
 武器製造業……………17,43  
 フタ・バンコヴァ鉄鋼……………187  
 仏領北アフリカ……………118  
 ブノワ=ダジー……………91,100  
 ブノワ=フル……………84,155  
 普仏戦争……………110,116,181,216  
 ブヤール, アンリ……………39,81  
 フェメル……………71  
 ブラウン……………264  
 フラシャ, ウージェーヌ……………24,83  
 ブラジル……………224,252  
 ブラッシー, トーマス……………89  
 ブラン, オノレ……………17  
 フランクフルト……………224  
 フランシュ・コンテ……………121  
 フランス・ガボン会社……………188  
 フランス・ベルギー石炭運河会社……………68  
 フランス革命(大革命)……………7,12,14,16,23,  
   29,45,59,60,179,207-209,211  
 フランス銀行……………19,41,59,60,64,74,84,  
   103,105,153-156,160,184,234,235  
 フランス銀行株……………72  
 フランス国債……………61,186  
 フランス商工業勸業一般銀行……………161  
 フランス商法……………54  
 フランス商法改正……………55  
 フランス植民地公債……………186  
 フランス鉄鋼連盟……………214,223-225,235  
 フランス領コンゴ鉱山……………188  
 フランダース……………244,263,266  
 ブラント……………42,159,162,193  
 フリードリッヒ・ハインリッヒ……………232  
 フリードリッヒ・フリック……………285  
 ブリエ……………124,218,219,223  
 ブリコーニュ……………80  
 ブリニー鉱山株式会社……………285  
 ブリュージュ……………272  
 ブリュッセル……………257,272,274,277,278  
 ブリュッセル銀行……………192,248  
 ブリュフィナ……………192,248,289,290,291,293  
 ブルゴーニュ……………11,72  
 フルシャンボー……………29,36,39,45,53,56.

70,72,80,99,101,123,159,182  
 ブルターニュ……………37  
 ブルミエ・ワイヤー製鋼会社……………252  
 ブレールジャン……………39,57,80  
 プレゴ……………60  
 フレサン……………123  
 フレニクール……………219  
 プロヴィダンス……………253,259,285,287,295  
 プロヴィダンス社……………289,293,295  
 プロヴィダンス製鉄……………247  
 プロシア……………4,145,209,265,273  
 プロデュラック……………251  
 兵器……………183,263,272  
 兵器産業……………129,179,209,247  
 兵器廠……………263  
 兵器生産……………4,177  
 ベーランゲン炭坑……………128,231,232,253  
 ベシノー・ユジヌ……………260  
 ベセージュ鋼管……………229  
 ベタン・ゴード……………122,123  
 ベタンジェ, ニコラス……………206,208  
 ベッケ……………80  
 ベッシー, ジョゼフ……………29  
 ベッセマー……………214  
 ベッセマー・トーマス製鋼……………124  
 ベッセマー鋼……………101,112,113  
 ベッセマー工場……………240  
 ベッセマー製鋼法……………112,118,119,  
 147,216,221,239,278  
 ベッセマー転炉……………112,113,147  
 ベトロシム……………259  
 ベトロフィナ……………260  
 ベナール……………69  
 ベナロヤ……………224,232,235  
 ベリー……………14,37  
 ベリエ……………60,62,70,208  
 ベリエ, カジミール……………62  
 ベリエ, シビオ……………62  
 ベリエ, ジャックコンスタンチン……………62,  
 206,207  
 ベリエ家……………70  
 ベルヴァル……………243  
 ベルヴェ鉱山株式会社……………250  
 ベルギー……………219,259  
 ベルギー・アルミニウム……………260

ベルギー・サンプル地質鉱山会社……………128  
 ベルギー銀行……………271,273,274,276  
 ベルギー磁器会社……………260  
 ベルギー製紙……………259  
 ベルギー石油会社……………260  
 ベルギー造船会社……………260  
 ベルギー領コンゴ……………248,258,260,295  
 ベルゴミネイラ……………252  
 ベルシニー……………155  
 ベルドネ, オーギュスト……………35  
 ベルリン……………268,273  
 ベレール, イザーク……………62-64,83,84,102  
 ベレール, エミール……………41,62,63,83,  
 156,158-160,163  
 ベレール兄弟……………102,106,155-157,162,174,185  
 ベレール家……………41,67  
 ヘンチリュッチャー……………159,161,162  
 ベンディックス……………194  
 ボイヤック……………119  
 貿易自由化政策……………150  
 ホエッシュ……………186  
 ホエニックス……………186,220  
 ホエルダア……………186,220  
 ボーヴェ……………71  
 ボーケール……………69,101,118  
 ボーダン兄弟……………81  
 ボードン金庫……………240  
 ボーニエ……………39,41,80,90  
 ボーム圧延……………282  
 ボーラン・タラボ……………68,91  
 ボーランド……………187,224,264,273  
 ボール・ヴェルト……………251  
 北西部……………121  
 北東部……………37,123  
 北部……………91,101,107,117,123,126,128,129  
 北部炭田……………100  
 北部鉄道……………41,90,107,143,144,152,158  
 保護・助成政策……………22,212  
 保護関税……………43  
 保護政策……………4,32,46  
 保護貿易……………46  
 保護貿易主義……………19  
 ボッフム……………186,252  
 ホボケン……………282  
 ホボケン冶金一般会社……………260

ボルドー	112, 158, 182, 193
ボルドー〜セツト鉄道	107, 157
ホワイトヒル	122
ボワグ兄弟	29, 39, 70, 80
ボワドヴァン	131
ボン=タ=ムソン	199, 250
ボン=タ=ムソン製鉄会社	128

## 【ま】

マイリッシュェ, エミール	200, 241, 244, 245, 252
マクドナルド, ビーター	264
マシフ・サントラル	71, 117, 150, 157
マッケンジー, ウィリアム	89
マテリアル・エレクトリック S.W.	194
マドリッド	157
マリ	265
マリエ炭坑	288
マリヌ	272, 274
マリヌ・エ・オメクール製鋼所	128, 219, 230
マリヌ・エ・サン=テチエンヌ製鋼	199, 243, 250, 287
マリヌ・エ・シュマン・ド・フェール	149
マリヌ製鋼	161
マルカール, A.	159, 163
マルキーズ	118
マルセイユ	102, 118
マルタン, エミール	113
マルタン, シャルル	205
マルタン, ジャン	205
マルタン, ビエール	113, 214
マルリー・コークス株式会社	285
マレー	70, 71, 185, 221, 264
マレー兄弟	41, 60, 84
マンゲ	68
マンチェスター製機械	274
マンビー	29, 56
マンビー・ウィルソン社	179
ミッシュェヴィル	122, 250
ミッシュェヴィル社	250
ミッシュェヴィル製鋼所	128
ミディ線	143, 157
南アフリカ	252
南ウェールズ	38
ミニエール	47
ミネット鉱	119, 120, 215, 239, 240
ミュールーズ	92, 143
ミュールーズ〜タン間	92
ミラボー	159, 162, 185, 222, 253
ミラボー銀行	197, 198, 233
ミルレ	69, 70, 80
ムーズ	45, 263, 266, 268
ムーズ鋼管会社	291, 295
ムーズ製鉄所	229
ムールト・エ・モーゼル	123, 219
無記名債券	64
ムシー	100
メヴィル, ウージェーヌ	82
メキシコ	188, 235
メキシコ産業開発会社	188
メサジュリ・マリティム	163
メサジュリ・ロワイヤル	90
メサンブレ	278
メルキュール管理参与会社	285
メルラン・エ・ゲラン	194
メンデリソン	234
モーヴージュ製鉄所	118
モーゼル	204, 250
モーゼル運河	217
モーゼル製鉄所	186
モクタ・エル・アディ	101
木炭製鉄	150
木炭精錬	24
木炭鉄	147
木炭鉄	53
木炭炉	9, 27, 28, 179, 181, 206, 213, 239
モティエール工場	70
モニー, ステファヌ	83
モネ, ジャン	130
モネ・ブラン	22, 227
モルガン	174
モルガン銀行	229
モルニー	155, 157, 160
モロッコ	125, 131, 234, 295
モロッコ信用銀行	188
モワイヨーヴル	13, 118, 122, 179, 183, 215, 217, 218, 226, 228
モワイヨーヴル・ラ・グランド	204
モンズ	91, 266, 272
モンズ〜バリ間	91

モンスニ	11,52,207
モンソー=ペイモン製鉄	290
モンソー・シュル・サンプル工場	289
モンティニー・シュル・サンプル	284
モンデヴィル	190
モントリオール	248
モンリュエソン	71,113,159

## 【や】

約束手形	64
U. C. P. M. I.	199, 230, 232
ユーラトム (欧州原子力共同体)	203, 204, 235
ユジヌス・ジルソン社	282, 285
ユジノール	179-199
ユニオン・パリジェンヌ銀行	197
ユニオン・ミニエール・デュ・ オー・カタンガ	248, 258, 260, 261
ユニオン・ミニエール・デュ・ オー・カタンガ社	248, 258, 260, 261, 295
ユニオン・ユーロペエンヌ	188-190, 198
ユニオン・ユーロペエンヌ・アシデュス トリエル・エ・フィナンシエール	187, 233
ユバル	70
四運河会社	82

## 【ら】

ラ・ヴルト	39, 80
ラ・グラン=コンプ鉱山ガール鉄道会社	68, 159
ラ・シオタ	102
ラ・ブルジョワーズ・エ・ニヴェル	247, 259
ラ・ベラルディエール	39, 70, 80
ライン	38, 238, 263
ライン・ウェストファリア	126
ラティ	197, 234, 235
ラティ・グループ	197, 198, 230
ラテン・アメリカ	188, 234
ラフィット, ジャック	104, 155
ラフィット, シャルル	41, 53, 60, 62-64, 68, 70
ラフィット・エ・プラント	89, 91
ラフィット金庫	72
ランブル炭田	253
リーブル貨	19

ルール	154, 272
リヴ・ド・ジエ	36, 81, 100, 122
リエージュ	263, 266-273, 275, 282, 290
リエージュ銀行	271, 276
リエージュ金融産業連合	284
リエージュ工場	268, 273
リエージュ大砲製造工場	269
リオ・ティント鉱山会社	260
リバプール=マンチェスター間	79
リブラル	251
リモージュ地方	157, 158
リュアン屈延ボルト社	244
リュウメリンゲン	186
リュシイ=セディヨ	163
リュティッヒ	283
リュメラングエ工場	287
リヨン	14, 38, 39, 80, 81, 90, 91, 102, 161
リヨン=アヴィニオン鉄道	107, 143
リヨン=ジュネーブ線	158
リヨン=地中海線	158, 159
リヨン人	100
リヨン地方	161
リル	85
臨海製鉄所	119
ル・アーヴル	143
ル・アーヴル=サウサンプトン・ルート	91
ル・アーヴル港	89
ル・クルーズ	6, 10, 27, 29, 46, 53, 56, 57, 62, 70, 72, 73, 95, 113, 122, 123, 125, 127, 129, 147, 149, 159, 177, 179, 182, 183, 192, 206, 207, 211, 213, 219, 226, 279
ル・クルーズ・ブランジー炭田	117
ル・クルーズ工場	11, 52, 69, 117, 197, 207
ル・クルーズ製鉄	189, 190
ル・クルーズ製鉄工場	113
ルイ14世	4, 17
ルイ16世	208
ルヴァンヴィル	111, 213
ルーアン製鉄	232
ルール	125, 131, 217-219, 232, 235, 242, 252
ルール工業地帯	271
ルール炭田	186
ルクセンブルク	192, 200, 217, 238-244, 246, 250, 251, 253, 255, 256, 262, 287, 288, 289, 291-296

ルクセンブルク経済……………246  
 ルクセンブルク鉱山……………241  
 ルクセンブルク資本……………243  
 ルクセンブルク鉄鋼業……………224, 240, 245  
 ルルー……………162  
 レーデン, フォン……………213  
 レース・ガラス製造工場……………207  
 レオポルド1世……………272  
 レユニオン・フィナンシエール……………102, 158, 159, 162  
 レユニオン・フィナンシエール・グループ……………164  
 レング, サミュエル……………164  
 連続式広幅ストリップ工場……………290  
 レントゲン少佐……………269, 270  
 ロアヌ……………17, 40, 68, 81  
 ロアヌ〜アンドレジウ〜サン＝テチエヌ〜リヨン線……………90  
 ロアヌ〜サン＝テチエヌ鉄道……………180  
 ロエブ, クーン……………174  
 ロー, ジョン……………19, 86  
 ロージンゲン……………186  
 ローテ・エルデ……………244, 250  
 ロートリンゲン鉱山鉄鋼連合……………225  
 ロートリンゲン製鉄所……………186  
 ロートリンゲン炭坑……………252  
 ローヌ河……………38, 80, 100, 101, 118, 157  
 ローノワ財閥……………293  
 ローノワ・グループ……………289  
 ローノワ伯爵 (コント・ド・ローノワ)……………289  
 ローノワ伯爵家……………295  
 ローラン……………9, 13, 250  
 ローラン・グループ……………199, 250  
 ロザリオ港……………188  
 ロシア……………27, 61, 157, 275  
 ロシア皇帝……………275  
 ロジャース……………12  
 ロスチャイルド, アルフォンス・ド……………163

ロスチャイルド, ジェームズ・ド……………40, 41, 53, 60, 61, 63, 68, 83, 84, 91, 101, 102, 104-106, 108, 156, 158-160, 162, 165, 185, 189, 194, 198  
 ロスチャイルド・グループ……………91, 261  
 ロスチャイルド・タラボ・グループ……………99  
 ロスチャイルド銀行……………295  
 ロスチャイルド家……………105, 107, 157, 258  
 ロダンジュ鉱山冶金会社……………289  
 ロダンジュ製鋼所……………240  
 ロック, ジョゼフ……………89  
 ロックフェラー……………174  
 ロッテルダム……………273  
 ロレーヌ……………10, 13, 29, 88, 110, 117, 118, 122, 124, 125, 127, 128, 150, 175, 179, 182, 183, 185, 186, 190, 204, 211, 215-219, 222, 223, 228, 235, 240, 253  
 ロレーヌ・エスコール……………198, 199, 228-230  
 ロレーヌ・ド・カルボニザシオン……………129  
 ロレーヌ鉄鉱山……………221  
 ロワール……………27, 32, 39, 40, 58, 68-70, 80-82, 88, 90, 99, 100  
 ロワール・イゼール製鉄鍛造会社……………57  
 ロワール河……………29, 38, 79, 81, 100, 177, 206  
 ロワール鉱山会社……………58, 68, 99, 100, 104, 159  
 ロワール製鉄……………199, 243  
 ロワール炭田……………68, 117  
 ロンウィ……………123, 215, 219, 230  
 ロンウィ製鋼……………128, 198, 219, 230  
 ロンドン……………60, 164, 224, 266  
 ロンバ……………250  
 ロンバルディア製鉄所……………186  
 ロンバルディア〜ヴェニス鉄道……………163

## 【わ】

ワット……………12, 21, 177, 179, 213  
 割引金庫……………207  
 割引銀行……………154, 155, 186  
 ワルシャワ……………275



## 【著者略歴】

島田悦子（しまだ えつこ）

1930年 東京に生まれる。

1953年 東京女子大学卒業。

1959年 東洋大学経済学部講師。

1962～66年 ヨーロッパ留学。主としてフランクフルト大学経済学部において研究。

現在 東洋大学経済学部教授，日本EU学会理事長。

主 著 『欧州鉄鋼業の集中と独占』新評論，1970年。

同書，増補版，1975年。

「欧州統合の発展——シューマン宣言から政治同盟へ——」東洋大学経済研究所『年報』第16号，1991年。

『EU統合の系譜』（共著）早稲田大学出版部，1995年。

## 欧州経済発展史論——欧州石炭鉄鋼共同体の源流——

1999年8月20日 第1刷発行 定価（本体5600円＋税）

著 者 島 田 悦 子

発行者 栗 原 哲 也

発行所 株式会社 日本経済評論社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2

電話 03-3230-1661 FAX 03-3265-2993

E-mail: [nikkeihyo@ma4.justnet.ne.jp](mailto:nikkeihyo@ma4.justnet.ne.jp)

URL: <http://www.nikkeihyo.co.jp/>

文昇堂印刷・山本製本所

装幀\*渡辺美知子

乱丁落丁はお取替えいたします。

Printed in Japan

© SHIMADA Etsuko 1999

ISBN4-8188-1082-7

図〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

奈倉文二著

## 兵器鉄鋼会社の日英関係史

—日本製鋼所と英国側株主—一九〇七—五二—

六八〇〇円

第二次大戦前の日英合併の一大兵器鉄鋼会社であった日本製鋼所の成立・発展過程を、アームストロング社、ヴィッカース社などとの関係で検討し、その経営史特徴を解明。

廣田功・森建資編著

## 戦後再建期のヨーロッパ経済

—復興から統合へ—

六五〇〇円

第二次大戦末から五〇年代後半にかけての各国の構想と政策はどのようなものであったか。戦後の経済発展の基礎はいかに築かれたのか。欧米の共存と対立の両面の構図も明らかにする。

日・ケルブレ著／雨宮・金子・永宥・古内訳

## ひとつのヨーロッパへの道

—その社会的考察—

三八〇〇円

生活の質や就業構造、教育や福祉などの社会的側面の同質性が増してきたことがEU統合へと至る大きな要因となつたと、平均的なヨーロッパ人の視点から考察する。

松井道昭著

## フランス第二帝政下のパリ都市改造

五四〇〇円

二〇〇〇年の歴史をもつパリは、一九世紀後半の第二帝政期に過去最大の都市改造が行われた。しかしこの「パリの外科手術」が帝政崩壊とパリ・コミューンの引き金となつたのである。

鈴木俊夫著

## 金融恐慌とイギリス銀行業

—ガーニー商会の経営破綻—

五六〇〇円

イングランド銀行に次ぐ巨大金融機関ガーニー商会の創業から崩壊までをヴィクトリア朝「バブル期」を背景に描く。十九世紀の事件、恐慌は今日にいかなる教訓を与えるのか。

(価格は税抜)

日本経済評論社